

# 猫と庄造と二人のをんな

谷崎潤一郎

青空文庫









福子さんどうぞゆるして下さい此この手紙雪ちゃんの名借りましたけどほんたうは雪ちゃんではありません、さう云いふたら無論貴女むろんあなたは私が誰だかお分りになつたでせうね、いえ／＼貴女は此この手紙の封切つて開けたしゆん間「扱さてはあの女か」ともうちやんと気がおつきになるでせう、そしてきつと腹立てゝ、まあ失礼な、……：友達の名前無断で使つて、私に手紙よこすとは何と云ふ厚かましい人と、お思ひになるでせう、でも福子さん察して下さいな、もしも私が封筒の裏へ自分の本名書いたらきつとあの人が見つけて、途中で横取りしてしまふことよう分つてるのですもの、是非ぜひ共ともあなたに読んで頂いただかう思ふたらかうするより外ほかないのですもの、けれど安心して下さいませ、私決して貴女に恨み云ふたり泣なき言ごと



聞かしたりするつもりではないのです。そりや、本気で云ふたら此の手紙の十倍も二十倍もの長い手紙書いたかて足りない位くらに思ひますけど、今更いまさらそんなこと云ふても何にもなりわしませんものねえ。オホ、、、、、私も苦勞しましたお蔭かげで大變強くなりましたのよ、さういつもく泣いてばかりるませんのよ、泣きたいことや口惜くやしいことたとくありますけど、もうく考へないことにして、できるだけ朗ほがらかに暮らす決心しましたの。ほんたうに、人間の運命云ふものいつ誰がどうなるか神様より外知る者はありませんのに、他人の幸福を羨うらやんだり憎にくんだりするなんて馬鹿げてますわねえ。

私がなんば無教育な女でも直接貴女に手紙上げたら失礼なことぐ



らゐ心得てますのよ、それから此の事は塚本さんからたび／＼云ふて貰ひもらましたけど、あの人どうしても聞き入れてくれませんので、今は貴女にお願いするより手段ないやうになりましたの。でもかう云ふたら何やたいそうむづかしいお願いするやうに聞えますけど、決して／＼そんな面倒なことではありません。私あなたの家庭から唯ただひと一つだけ頂きたいものがあるのです。と云ふたからとて、勿論もちろん貴女のあの人を返せと云ふではありません。実はもつと／＼下らないもの、つまらないもの、……り／＼ちやんがほしいのです。塚本さんの話では、あの人はり／＼なんぞくれてやつてもよいのだけれど、福子さんが離すのいや／＼云ふてなされると云ふのです、ねえ福子さん、それ本当でせうか？ たった

一つの私の望み、貴女が邪魔してらつしやるのでせうか。福子さんどうぞ考へて下さい私は自分の命よりも大切な人を、……いえ、そればかりか、あの人と作つてゐた楽しい家庭のすべてのものを、残らず貴女にお譲りしたのです。茶碗のかけ一つも持ち出した物はなく、輿こし入れ入の時に持つて行つた自分の荷物さへ満足に返しては貰ひません。でも、悲しい思ひ出の種になるやうなものない方がよいかも知れませんけれど、せめてリ、ーちやん譲つて下すつてもよくはありません？ 私は外に何も無理なこと申しません、踏ふまれ蹴けられ叩かれてもじつと辛しんぼう抱して来たのです。その大きな犠牲に対して、たつた一匹の猫を頂きたいと云ふたら厚かましいお願いでせうか。貴女に取つてはほんにどうでもよいや

うな小さい獣けものですけれど、私にしたらどんなに孤独慰められるか、  
……私、弱虫と思はれたくありませんが、リ、ーちやんでもゐ  
てゝくれなんたら淋しくて仕様がありませんの、……猫より外  
に私を相手にしてくれる人間世の中に一人もゐないのですもの。  
貴女は私をこんなにも打ち負かしておいて、此の上苦しめようと  
なさるのでせうか。今の私の淋しさや心細さに一点の同情も寄せ  
て下さらないほど、無慈悲むじひなお方かたなのでせうか。

いえ、貴女はそんなお方ではありません、私よく分つてゐるの  
ですが、リ、ーちやんを離さないのは、あなたでなくて、あの人  
ですわ、きつとくさうですわ。あの方はリ、ーちやんが大好き  
なのです。あの人いつも「お前となら別れられても、此の猫とや

つたらよう別れん」と云ふてたのです。そして御飯の時でも夜寝る時でも、リ、ーちゃんの方がずっと私より可愛がられてゐたのです。けど、そんなら何で正直に「自分が離しともないのだ」と云はんと、あなたのせゐにするのでせう？ さあその訳を<sup>わけ</sup>よう考へて御覧なさりませ、……………

あの人は嫌な私を追ひ出して、好きな貴女と一緒にになりました。私と暮してた間こそリ、ーちゃんが必要でしたけど、今になつたらもうそんなもん邪魔になる筈<sup>はず</sup>ではありませんか。それともあの人、今でもリ、ーちゃんがあなかつたら不足を感じるのでせうか。そしたら貴女も私と同じに、猫以下と見られてるのでせうか。まあ御免なさい、つい心にもないこと云ふてしまつて。……………よも

やそんな阿呆らしいことあらうとは思ひませんが、でもあの  
人、自分の好きなこと隠して貴女のせむにする云ふのは、やつぱ  
りいくらか気が咎<sup>とが</sup>めてゐる証拠では、……オホ、、、、、も  
うそんなこと、どつちにしたかて私には関係ないのでしたわねえ、  
けどほんたうに御用心なさいませ、たかゞ猫ぐらゐと気を許して  
いらしつたら、その猫にさへ見かへられてしまふのですわ。私決  
して悪いことは申しません、私のためより貴女のため思ふて上げ  
るのです、あのり、ーちゃんあの人の側<sup>そば</sup>から早う離<sup>はよ</sup>してしまひな  
さい、あの人それを承知しないならいよく怪しいではありません  
んか。……

福子は此の手紙の一字一句を胸に置いて、庄造とり、のするこ  
とにそれとなく眼をつけてゐるのだが、小鰯こあじの二杯酢さかなを着きにして  
チビリ／＼傾けてゐる庄造は、一ひと口飲くちんでは猪口ちよくを置くと、

「リ、ー」

と云つて、鰯はしの一つを箸で高々と摘つまみ上げる。リ、ーは後脚で  
立ち上つて小判型のチャブ台ふちの縁に前脚をかけ、皿の上の肴さかなをじ  
つと睨にらまへてゐる恰好は、バアのお客がカウンターに倚よりかゝつ  
てゐるやうでもあり、ノートルダムの怪獣のやうでもあるのだが、  
いよく餌えさが摘まみ上げられると、急に鼻をヒクヒクさせ、大き  
な、伶俐りこうさうな眼を、まるで人間がびつくりした時のやうにまん  
まるまるく開いて、下から見上げる。だが庄造はさう易々やすやすとは投げて

やらない。

「そうれ！」

と、鼻の先まで持つて行つてから、逆に自分の口の中へ入れる。そして魚に<sup>さかな</sup>滲みてゐる酢をスツパスツパ吸ひ取つてやり、堅さうな骨は<sup>かくだ</sup>噛み砕いてやつてから、又もう一遍摘まみ上げて、遠くしたり、近くしたり、高くしたり、低くしたり、いろ／＼にして見せびらかす。それにつられてリ、リは前脚をチャブ台から離し、幽霊の手のやうに胸の両側へ上げて、よち／＼歩き出しながら追ひかける。すると獲物をリ、リの頭の真上へ持つて行つて静止させるので、今度はそれに狙ひを定めて、一生懸命に跳び着かうとし、跳び着く拍子に素早く前脚で目的物を<sup>つか</sup>掴まうとするが、アハ

ヤと云ふ所で失敗しては又跳び上る。かうしてやうく一匹の鰺をせしめる迄に五分や十分はかゝるのである。

此の同じことを庄造は何度も繰り返してゐるのだつた。一匹やつては一杯飲んで、

「リ、ー」

と呼びながら次の一匹を摘まみ上げる。皿の上には約二寸程にすんの長さの小鰺が十二三匹は載つてゐた筈だが、恐らく自分が満足に食べたのは三匹か四匹に過ぎまい、あとはスツパスツパ二杯酢の汁をしやぶるだけで、身はみんなくれてやつてしまふ。

「あ、あ、あ痛いた！ 痛いやないか、こら！」

やがて庄造は頓とんきよう興きような声を出した。リ、ーがいきなり肩の上へ





跳び上つて、爪を立てたからなのである。

「こら！ 降り！ 降りんかいな！」

残暑もそろ／＼衰へかけた九月の半ば過ぎだつたけれど、太つた人にはお定まりの、暑がりやで汗あせツ掻かきの庄造は、此の間の出水で泥だらけになつた裏の縁えん鼻はなへチャブ台を持ち出して、半袖のシャツの上に毛糸の腹巻をし、麻の半股引はんももひきを穿はいた姿のまゝ、胡あ坐ぐらをかいてゐるのだが、その円々と膨らんだ、丘のやうな肩の肉の上へ跳び着いたり、―は、つる／＼滑り落ちさうになるのを防ぐために、勢ひ爪を立てる。と、たつた一枚のちぢみのシャツを透して、爪が肉に喰くひ込むので、

「あ痛！ 痛！」

と、悲鳴を挙げながら、

「えゝい、降りんかいな！」

と、肩を揺す振つたり一方へ傾けたりするけれども、さうすると猶落<sup>な</sup>ちまいとして爪を立てるので、しまひにはシャツにポタポタ血がにじんで来る。でも庄造は、

「無茶しよる。」

とボヤキながらも決して腹は立てないのである。リ、ーはそれをすつかり呑み込んでゐるらしく、頬<sup>ほ</sup>ぺたへ顔を擦りつけてお世辞を使ひながら、彼が魚を啣<sup>さかなふく</sup>んだと見ると、自分の口を大胆に主人の口の端<sup>はた</sup>へ持つて行く。そして庄造が口をもぐぐさせながら、舌で魚を押し出してやると、ヒヨイとそいつへ咬<sup>か</sup>み着くのだが、

一度に喰ひちぎつて来ることもあれば、ちぎつたついでに主人の口の周りを嬉しさうに舐め廻すこともあり、主人と猫とが両端を咬<sup>くわ</sup>へて引つ張り合つてゐることもある。その間庄造は「うツ」とか、「ペツ、ペツ」とか、「ま、待ちいな！」とか合<sup>あい</sup>の手を入れ、顔をしかめたり唾<sup>つばき</sup>液を吐いたりするけれども、実はリ、ーと同じ程度に嬉しさうに見える。

「おい、どうしたんや?——」

だが、やつとのことで一と休みした彼は、何気なく女房の方へ杯をさし出すと、途端に心配さうな上<sup>うわめづ</sup>眼使ひをした。どうした訳か今しがたまで機嫌の好かつた女房が、酌をしようとししないで、両<sup>ふところ</sup>手を懷に入れてしまつて、真正面からぐつと此<sup>こち</sup>方を視<sup>み</sup>詰めてゐる。

る。

「そのお酒、もうないのんか？」

出した杯を引つ込めて、オツカナビツクリ眼の中を覗き込んだが、相手はたじろぐ様子もなく、

「ちよつと話があるねん。」

と、さう云つたきり、口惜くやしさうに黙りこくつた。

「なんや？ え、どんな話？——」

「あんた、その猫品子さんに譲つたげなさい。」

「何でやねん？」

藪やぶから棒に、そんな乱暴な話があるものかと、つゞけざまに眼をパチクリさせたが、女房の方も負けず劣らず険悪な表情をしてゐ

るので、いよく分らなくなつてしまつた。

「何で又急に、………」

「何でも譲つたげなさい、明日塚本さん呼んで、早<sup>は</sup>よ渡してしまひなさい。」

「いつたい、それ、どう云ふこつちやねん？」

「あんた、否<sup>いや</sup>やのん？」

「ま、まあ待ち！ 訳も云はんとさう云うたかて無理やないか。何ぞお前、氣に触つたことあるのんか。」

リ、ーに対する焼餅<sup>やきもち</sup>？——と、一応思ひついてみたが、それ

も腑<sup>ふ</sup>に落ちないと云ふのは、もと／＼自分も猫が好きだつた筈なのである。まだ庄造が前の女房の品子と暮してゐた時分、品子が

とき／＼猫のことで焼餅を焼く話を聞くと、福子は彼女の非常識を笑つて、嘲ちやうろう弄の種にしたものだつた。そのくらゐだから、勿論庄造の猫好きを承知の上で来たのであるし、それから此方、庄造ほど極端ではないにしても、自分も彼と一緒になつてリ、一を可愛がつてゐたのである。現にかうして、三度々々の食事には、夫婦さし向ひのチャブ台の間へ必ずリ、一が割り込むのを、今迄と兎や角かく云つたことは一度もなかつた。それどころか、いつでも今日のやうな風に、夕飯の時にはリ、一とゆつくり戯れながら晩酌を楽しむのであるが、亭主と猫とが演出するサーカスの曲藝にも似た珍風景を、福子とても面白さうに眺めてゐるばかりか、時には自分も餌を投げてやつたり跳び着かせたりするくらゐで、リ、

一の介在することが、新婚の二人を一層仲好く結び着け、食卓の空気を明朗化する効能はあつても、邪魔になつてはゐない筈だつた。とすると一体、何が原因なのであらう。つい昨日まで、いや、ついさつき、晩酌を五六杯重ねるまでは何のこともなかつたのに、いつの間にか形勢が變つたのは、何かほんの些細なことが癢に触つたのでもあらうか。それとも「品子に譲つてやれ」と云ふのを見ると、急に彼女が可哀さうにでもなつたのか知らん。

さう云へば、品子が此処ここを出て行く時に、交換条件の一つとしてリ、一を連れて行きたいと云ふ申し出があり、その後も塚本を仲に立てゝ、二三度その希望を伝へて来たことは事実である。だが庄造はそんな云ひ草は取り上げない方がよいと思つて、そのつ



ど断つてゐるのであつた。塚本の口上こうじょうでは、連れ添ふ女房を追ひ出して余所よその女を引きずり込むやうな不実な男に、何の未練もないと云ひたいところだけれども、やつぱり今も庄造のことが忘れられない、恨んでやろう、憎んでやろうと努めながら、どうしてもそんな氣になれない、ついては思ひ出の種になるやうな記念の品が欲しいのだが、それにはリ、ーちやんを此方へ寄越して貰へまいか、一緒に暮してゐた時分には、あんまり可愛がられてゐるのが忌いやましくしくて、蔭でいちめたりしたけれども、今になつては、あの家の中にあつた物が皆なつかしく、分けてもリ、ーちやんが一番なつかしい、せめて自分は、リ、ーちやんを庄造の子供だと思つて精一杯可愛がつてやりたい、さうしたら辛い悲し

い氣持がいくらか慰められるであらう。――

「なあ、石井君、猫一匹ぐらゐ何だんね、そない云はれたら可哀さうやおまへんか。」

と、さう云ふのだつたが、

「あの女の云ふこと、真まに受けたらアキまへんで。」

と、いつも庄造はさう答へるに極きまつてゐた。あの女は兎角懸とかくかけひ

引きが強きくつて、底に底があるのだから、何を云ふやら眉唾物まゆつばもの

である。第一剛情ごうじようで、負けず嫌ひの癖に、別れた男に未練が

あるの、リ、ーが可愛くなつたのと、しをらしいことを云ふのが

怪しい。彼奴あいつが何でリ、ーを可愛がるものか。きつと自分が連れ

て行つて、思ふさまいぢめて、腹癒はらいせをする氣なのだらう。さう

でなかつたら、庄造の好きな物を一つでも取り上げて、意地悪をしようと思ふのだらう。——いや、そんな子供じみた復讐心より、もつとく深い企みがあるのかも知れぬが、頭の単純な庄造には相手の腹が見透せないだけに、変に薄気味が悪くもあれば、反感も募<sup>つの</sup>るのだつた。それでなくてもあの女は、随分勝手な条件を沢山持ち出してゐるではないか。しかしもとく此方に無理があるのだし、一日も早く出て貰ひたいと思つたればこそ、大概なことは聞いてやつたのに、その上りへまで連れて行かれて溜<sup>たま</sup>るものか。それで庄造は、いくら塚本が執<sup>しつ</sup>拗<sup>こ</sup>く云つて来ても、彼一流の婉<sup>えん</sup>曲<sup>きよく</sup>な口実でやんはり逃げてゐるのであつたが、福子もそれに賛成なのは無論のことで、庄造以上に態度がハツキリし

てゐたのである。

「訳を云ひな！ 何のこツちや、僕さつぱり見当が付かん。」

さう云ふと庄造は、銚子を自分で引き寄せて、手酌で飲んだ。それから股をぴたツと叩いて、

「蚊遣線香かやりせんこうあれへんのんか。」

と、ウロ／＼その辺を見廻しながら、半分ひとりごとのやうに云つた。あたりが薄暗くなつたので、つい鼻の先の板塀の裾から、蚊がワン／＼云つて縁側の方へ群がつて来る。少し食ひ過ぎた云ふ恰好でチャブ台の下にうづくまつてゐたり、は、自分のことが問題になり出した頃こそ／＼と庭へ下りて、塀の下をくゞつて、何処かへ行つてしまつたのが、まるで遠慮でもしたやうで可お

笑<sup>か</sup>しかつたが、鰯<sup>たら</sup>ふく御馳走になつた後では、いつでも一遍うつと姿を消すのであつた。

福子は黙つて台所へ立つて行つて、渦巻の線香を捜して来ると、それに火をつけてチャブ台の下へ入れてやつた。そして、

「あんた、あの鰯、みんな猫に食べさせなはつたやろ？　自分が食べたのん二つか三つよりあれしまへんやろ？」

と、今度は調子を和<sup>やわ</sup>げて云ひ出した。

「そんなこと僕、覚えてエへん。」

「わてちやんと数へてゝん。そのお皿の上に最初十三匹あつてんけど、リ、ーが十匹食べてしもて、あんたが食べたのん三匹やないか。」

「それが悪かつたのんかいな。」

「何で悪い云ふこと、分つてなはんのんか。なあ、よう考へて御覧。わて猫みたいなもん相手にして焼餅<sup>やきもち</sup>焼くのんと違ひまつせ。けど、鰺の二杯酢わては嫌ひや云ふのんに、僕好きやよつてに拵<sup>こしら</sup>へてほしい云ひなはつたやろ。そない云うといて、自分ちよつとも食べんとおいといてからに、猫にばつかり遣<sup>や</sup>つてしもて、……

……

彼女の云ふのは、かうなのである。――

阪神電車の沿線にある町々、西<sup>にしのみや</sup>宮、蘆屋<sup>あしや</sup>、魚崎<sup>うおぎき</sup>、住吉<sup>すみよし</sup>あたりでは、地元<sup>じもと</sup>の浜で獲<sup>と</sup>れる鰺<sup>いわし</sup>や鰯<sup>いわし</sup>を、「鰺の取れく」「鰯の取れく」と呼びながら大概毎日売りに来る。「取れく」とは

「取りたて」と云ふ義で、値段は一杯十銭から十五銭ぐらゐ、それで三四人の家族のお数<sup>かず</sup>になるところから、よく売れると見えて一日に何人も来ることもある。が、鰯も鰯も夏の間は長さ一寸<sup>いっすん</sup>ぐらゐのもので、秋<sup>あきぐち</sup>口になるほど追ひ／＼寸が伸びるのであるが、小さいうちは塩焼にもフライにも都合が悪いので、素焼きにして二杯酢に漬<sup>し</sup>け、※<sup>しょうが</sup>我を刻んだのをかけて、骨ごと食べるより仕方がない。ところが福子は、その二杯酢が嫌ひだと云つて此の間から反対してゐた。彼女はもつと温かい脂<sup>あぶら</sup>ツこいものが好きなので、こんな冷めたいモソモソしたものを食べさせられては悲しくなると、彼女らしい贅<sup>ぜいたく</sup>沢を云ふと、庄造は又、お前はお前で好きなものを拵へたらよい、僕は小鰯が食べたいから自分で料理

すると云つて、「取れく」が通ると勝手に呼び込んで買ふのである。福子は庄造と従兄弟同士で、嫁に來た事情が事情だから、しゆうとめ姑には氣がねが要らなかつたし、來た明くる日から我が儘一杯に振舞つてゐたけれど、まさか亭主が庖丁ほうちようを持つのを見てゐる訳に行かないから、結局自分がその二杯酢を拵へて、いやくながら一緒にたべることになつてしまふ。おまけにそれが、もう此処のところ五六日も続いてゐるのであるが、二三日前にふと氣が付いたことゝ云ふのは、女房の不平を犯してまでも食膳に上せる程のものを、庄造は自分で食べることか、リ、ーにばかり与へてゐる。それでだんく考へて見たら、成る程あの鰯は姿が小さくて、骨が柔かで、身をむしつてやる面倒がなくて、値段のわりに



数がある、それに冷めたい料理であるから、毎晩あんな風にして猫に食はせるには最も適してゐる訳で、つまり庄造が好きだと云ふのは、猫が好きだと云ふことなのである。此処の家では、亭主が女房の好き嫌ひを無視して、猫を中心に晩のお数をきめてゐたのだ。そして亭主のためと思つて辛抱してゐた女房は、その実猫のために料理を拵へ、猫のお付き合ひをさせられてゐたのだ。

「そんなことあれへん、僕、いつかて自分が食べよう思つて頼むねんけど、リ、ーの奴があないに執拗<sup>ひつこ</sup>う欲しがるさかいに、ついウカツとして、後から／＼投げてまうねんが。」

「嘘<sup>うそ</sup>云ひなさい、あんた始めからリ、ーに食べささう思つて、好きでもないもん好きや云うてるねんやろ。あんた、わてより猫が

大事やねんなあ。」

「ま、ようそんなこと。………」

ぎょうさん  
仰山に、吐き出すやうにさう云つたけれど、今の一言ですつかり萎れた形だつた。  
しお

「そんなら、わての方が大事やのん？」

「きまつてるやないか！ 阿呆<sup>あほう</sup>らしなつて来るわ、ほんまに！」

「口でばかりそない云はんと、証拠見せてエな。そやないと、あんたみたいなもん信用せエへん。」

「もう明日から鰯買ふのん止めにせう。な、そしたら文句ないねんやろ。」

「それより何より、リ、リ遣<sup>や</sup>つてしまひなはれ。あの猫ゐんやう

になつたら一番えゝねん。」

まさか本気で云ふのではないだらうけれど、タカを括り過ぎて依  
 怙地こじになられては厄介なので、是非なく庄造は膝頭ひざがしらを揃へ、  
 キチンと畏まつてすわり直すと、前屈まえかがみに、その膝の上へ両手  
 をつきながら、

「さうかてお前、虐めいじられること分つてゝあんな所ところへやれるかい  
 な。そんな無慈悲なこと云ふもんやないで。」

と、哀れツぽく持ちかけて、嘆願するやうな声を出した。

「なあ、頼むさかいに、そない云はんと、……………」

「ほれ御覧、やつぱり猫の方が大事なんやないかいな。リ、ーど  
 ないぞしてくれへなんたら、わて去いなして貰ひまつさ。」

「無茶云ひな！」

「わて、畜生と一緒にされるのん嫌ですよつてにな。」

あんまりムキになつたせるか、急に涙が込み上げて来たのが、自分にも不意打ちだつたらしく、福子は慌てゝ亭主の方へ背中を向けた。

雪子の名を使つた品子のあの手紙が届いた朝、最初に彼女が感じたのは、こんないたづらをして私達の間へ水を挿<sup>さ</sup>さうとするなんて、何と云ふ嫌な人だらう、誰がその手に乗つてやるもんか、と云ふことだつた。品子の腹は、かう云ふ風に書いてやつたら、結局福子はリ、ーのゐることが心配になつて、此方へ寄越すかも知

れない、さうなつたら、それ見たことか、人を笑つたお前さんも猫に焼餅を焼くぢやないか、やつぱりお前さんだつてさう御亭主に大事にされてもゐないのだねえと、手を叩いて嘲つて<sup>あざけ</sup>やらう、そこまで巧く行かないとしても、此の手紙をキツカケに家庭に風波が起るとしたら、それだけでも面白いと、さう思つてゐるに違ひないので、その鼻を明かしてやるのには、いよく夫婦が仲好く暮すやうにして、こんな手紙などでんで問題にならなかつたと云ふ所を見せてやり、二人が同じやうにりゝを可愛がつて、とても手放す気がないことをもつとハツキリ知らしてやる、——

もうそれに越したことはないのであつた。  
だが、生憎<sup>あいにく</sup>なことに此の手紙の来た時期が悪かつた。と云ふの

は、ちやうど此の二三日小鰯の二杯酢の一件が福子の胸につかへてゐて、一遍亭主を取つちめてやらうと考へてゐた矢先だつたのである。一体、彼女は庄造が思つてゐるほど猫好きではないのだが、庄造の氣持を迎へるためと、品子への面当てと、両方の必要から自然猫好きになつてしまひ、自分もさう思へば人にも思はせてゐたのであつて、それは彼女がまだ此の家へ乗り込まない時分、蔭で姑のおりんなどとグルになつて専ら品子の追ひ出し策にかゝつてゐる間のことだつた。そんな次第で、此処へ来てからもりゝを可愛がつてやつて、せいぜい精々猫好きで通してゐたのだが、だんく彼女はその一匹の小さい獣の存在を、呪はしく思ふやうになつた。何でも此の猫は西洋種だと云ふことだつたが、以前、此処

へお客で遊びに来て膝の上などへ乗せてやると、手触りの工合が柔かで、毛なみと云ひ、顔だちと云ひ、姿と云ひ、ちよつと此の辺には見当らない綺麗な雌猫であつたから、その時はほんたうに愛らしいと思ひ、こんなものを邪魔にするとは品子さんと云ふ人も變つてゐる、やつぱり亭主に嫌はれると、猫にまで僻<sup>ひが</sup>みを持つのか知らんと、面当てもなくさう感じたものだつたけれど、今度自分が後<sup>あとがま</sup>釜へ直つてみると、自分は品子と同じ扱ひを受ける訳でもなく、大切にされてゐることは分つてゐながら、どうも品子を笑へない氣持になつて来るのが不思議であつた。それと云ふのは、庄造の猫好きが普通の猫好きの類<sup>たぐい</sup>ではなくて、度を越えてゐるせゐなのである。實際、可愛がるのもいゝけれども、一匹の魚

を（而も女房の見てゐる前で！）口移しにして、引張り合つたりするなどは、あまり遠慮がなさすぎる。それから晩の御飯の時に割り込んで来られることも、正直のところは愉快でなかつた。夜は姑が氣を利かして、自分だけ先に食事を済まして二階へ上つてくれるのだから、福子にしてみればゆつくり水入らずを楽しみたいのに、そこへ猫奴が這入はいつて来て亭主を横取りしてしまふ。好いあんばいに今夜は姿が見えないなと思ふと、チャブ台の脚を開く音、皿小鉢のカチャンと云ふ音を聞いたら直ぐ何処かゝら歸つて来る。たまに歸らないことがあると、怪けしからないのは庄造で、「リ、ー」「リ、ー」と大きな声で呼ぶ。歸つて来る迄は何度も、二階へ上つたり、裏口へ廻つたり、往来へ出たりして呼び立



てる。今に帰るだらうから一杯飲んでいらつしやいと、彼女が銚子を取り上げても、モチ／＼してゐて落ち着いてくれない。さう云ふ場合、彼の頭はリ／＼のことで一杯になつてゐて、女房がどう思ふかなどと、ちよつとも考へてみないらしい。それにもう一つ愉快でないのは、寝る時にも割り込んで来ることである。庄造は今迄猫を三匹飼つたが、蚊帳かやをくぐることを知つてゐるのは、リ／＼だけだ、全くり／＼は慍巧だと云ふ。成る程、見てゐると、ぴつたり頭をたたみ畳へす擦り付けて、する／＼と裾すそをくぐり抜けて這入る。そして大概は庄造の布団の側でねむ眠るけれども、寒くなれば布団の上へ乗るやうになり、しまひには枕の方から、蚊帳をくぐるのと同じ要領で夜具の隙間へもぐり込んで来ると云ふ。そんな風

だから、此の猫にだけは夫婦の秘密を見られてしまつてゐるのである。

それでも彼女は、今更猫好きの看板を外して嫌ひになり出すキツカケがないのと、「相手はたかが猫だから」と云ふ己惚れうぬぼに引き擦られて、腹の虫を押さへて来たのであつた。あの人はいゝゝを玩具おもちゃにしてゐるだけなので、ほんたうは私が好きなのである、

あの人にとつて天にも地にも懸け換へのないのは私なのだから、変な工合に氣を廻したら、自分で自分を安つぽくする道理である。もつと心を大きく持つて、何の罪もない動物を憎むことなんか止めにしようと、さう云ふ風に氣を向けかへて、亭主の趣味に歩調を合はせてゐたのだが、もとゝこらしよう、慄へ性のない彼女にそんな我慢

が長つゞきする筈がなく、少しづつ不愉快さが増して来て顔に出かゝつてゐたところへ、降つて湧いたのが今度の二杯酢の一件だつた。亭主が猫を喜ばすために、女房の嫌ひなものを食膳に上せる、而も自分が好きなふりをして、女房の手前を繕つてまでも！——これは明かに、猫と女房とを天秤てんびんにかけると猫の方が重い、と云ふことになる。彼女は見ないやうにしてゐた事実をまぎくくと鼻先へ突き付けられて、最早もはや己惚れの存する余地がなくなつてしまつた。

ありていに云ふと、そこへ品子の手紙が舞ひ込んで来たことは、彼女の焼餅を一層煽あおつたやうでもあるが、一面には又、それを爆発の一步手前で抑制すると云ふ働きをした。品子さへおとなしく

してゐたら、リ、ーの介在をもう一日も黙視出来なくなつた彼女は、早速亭主に談判して品子の方へ引き渡させる積りつもでゐたのに、あんないたづらをされてみると、素直に註文を聴いてやるのが忌ま／＼しい。つまり亭主への反感と、品子への反感と、孰方どちらの感情で動いたらよいか板挟みになつてしまつたのである。手紙の来たことを亭主に打ち明けて相談すれば、事實はさうでないにも拘はず品子にケシカケられたやうな形になるのが心外であるから、それは内証にして置いて、孰方が余計憎らしいかと考へると、品子の遣り方やも腹が立つけれども、亭主の仕打ちも堪かん忍にんがならなことい。殊に此の方は毎日眼の前で見えてゐるのだから、どうにもムシヤクシヤする訳だし、それに、本当のことを云ふと、「用心しな

いと貴女も猫に見換へられる」と書いてあつたのが、案外ぐんと胸にこたへた。まさかそんな馬鹿げたことがとは思ふけれども、リ、ーを家庭から追ひ払つてしまひさへすれば、イヤな心配をしないで済む。たゞさうすると品子に溜<sup>りゆう</sup>飲<sup>いん</sup>を下<sup>さ</sup>げさせることになるのが、いかにも残念でたまらないので、その方の意地が昂<sup>こ</sup>じて来ると、猫のことぐらゐ辛抱しても誰があゝの女の計略なんぞにと、云ふ風になる。――で、今日の夕方チャブ台の前にすわる迄は、彼女はさう云ふグル／＼廻りの状態に置かれて懊<sup>じ</sup>れてゐたのだが、皿の上の鰯が減つて行くのを数へながらいつものいちやつきを眺めてゐると、つかあツとして亭主の方へ鬱<sup>う</sup>憤<sup>つ</sup>を破裂させてしまつたのである。

しかし最初は嫌がらせにさう云つた迄で、本気でリ、ーを追ひ出す積りはなかつたらしいのであるが、へんに問題をコジレさせて退つのび引きならないやうにしたのは、庄造の態度が大いに原因してゐるのである。庄造としては、福子が腹を立てたのは至極もつと尤もなのであるから、イザコザなしに、あつさり彼女の希望を入れて納な得とくしてしまへば一番よかつた。さうして意地を通してさへやつたら、却かえつて後は機嫌が直つて、それには及ばぬと云ふことになつたかも知れないのに、道理のないところへ道理をつけて、逃げを打つた。これは庄造の悪い癖なので、イヤならイヤときつぱり云つてしまふならいゝのだが、なるだけ相手を怒らせないやうに、追ひ詰められるまでは瓢ひょう箆うたな 鯰なまずに受け流してゐて、土壇場どたんばへ

来るとヒヨイと寝返る。もう少しで承知しさうな口ぶりを見せて、その実決して「うん」と云はない。気が弱さうで、案外ネチネチした狡い人だと云ふ印象を与へる。福子は亭主が、外のことなら彼女の我が儘を通すくせに、此の問題に関する限り、「たかが猫なんぞ」と何でもなさうに云ひながら、中々同意しないのを見ると、リ、ーに對する愛着が想像以上に深いものと思へないので、いよく捨てゝ置けない気がした。

「ちよつと、あんた！………」

その晩彼女は、蚊帳の中に這入つてから又始めた。

「ちよつと、此方向こつちきなさい。」

「あゝ、僕眠たい、もう寝さして。………」

「あかん、さつきの話きめてしまはなんたら、寝させへん。」

「今夜に限つたことあるかいな、明日にして。」

表は四枚の硝子戸ガラスどにカーテンを引いてあるだけなので、軒燈けんとうの  
あかりがぼんやり店の奥へ洩れて来て、もや／＼と物が見える中  
で、庄造は掛け布団をすつかり剥はいで仰向きに臥てゐたが、さう  
云ふと女房の方へ背中を向けた。

「あんた、そつち向いたらあかん！」

「頼むさかいに寝さしてエな、ゆうべ僕、蚊帳の中に蚊ア這入つ  
て、ちよつとも寝られへなんでん。」

「そしたら、わての云ふ通りしなはるか。早う寝たいなら、それ  
きめなさい。」



「殺<sup>せつ</sup>生<sup>しょう</sup>やなあ、何をきめるねん。」

「そんな、寝惚<sup>ねぼ</sup>けたふりしたかて、胡麻<sup>ごま</sup>化<sup>か</sup>されまつかいな。リ、  
―遣<sup>や</sup>んなはるのんか孰<sup>どっち</sup>方<sup>ち</sup>だす？ 今はつきり云うて頂戴。」

「明日、――明日まで考へさして貰<sup>もら</sup>を。」

さう云つてゐるうちに、早くも心地よさうな寢息を立てたが、  
「ちよつと！」

と云ふと、福子はムツクリ起き上つて亭主の側にすわり直すと、  
いやと云ふ程<sup>しり</sup>臀<sup>つね</sup>の肉を抓<sup>つか</sup>つた。

「痛い！ 何をするねん！」

「あんた、いつかてリ、―に引つ搔かれて、生<sup>なま</sup>傷<sup>きず</sup>絶<sup>ぜつ</sup>やしたこと  
ないのんに、わてが抓つたら痛いのか。」

「痛！ えゝい、止めんかいな！」

「此れぐらゐ何だんね、猫に搔かすぐらゐやつたら、わてかて体ぢゆう引つ搔いたるわ！」

「痛、痛、痛、……………」

庄造は、自分も急に起き直つて防禦<sup>ぼうぎよ</sup>の姿勢を取りながら、続けざまに叫んだ。二階の年寄に聞かせたくないのです、大きな声は立てなかつたが、抓るかと思ふと今度は引つ搔く。顔、肩、胸、腕、腿、所嫌はず攻めて来るので、慌てゝ避ける度<sup>たびごと</sup>毎にボタン！と云ふ地響きが家ぢゆうへ伝はる。

「どないや？」

「もう堪忍、……………堪忍！」

「眼工覚めなはったか？」

「覚めいでかいな！ あゝ痛、ヒリ／＼するわ。……………」

「そしたら、今のこと返事しなさい、孰方どっちだす？」

「あゝ痛、……………」

それには答へないで、顔をしかめながら方々をさすつてゐると、

「又だつか、胡麻ごま化したら此れだつせ！」

と、二三本の指でモロに頬つぺたをがりツと行かれたのが、飛び上るほど痛かつたらしく、思はず、

「いたア——」

と泣き声を出したが、途端にリ、ーまでがびつくりして、蚊帳の外へ逃げ出して行つた。

「僕、何でこんな目に遭はんならん。」

「ふん、リ、ーのためや思うたら、本望だつしやろが。」

「そんな阿呆らしいこと、まだ云うてるのんか。」

「あんたがはつきりせんうちは、何ぼでも云ひまつせ。」

あ、わてを去<sup>い</sup>なすかり、遣<sup>や</sup>んなはるか、孰方だす？」

「誰がお前を去なす云うた？」

「そんならリ、ー遣んなはるのんか？」

「そない孰方かにきめんならんこと………」

「あかん、きめて欲しいねん。」

さう云ふと福子は、胸<sup>むなぐら</sup>倉を取つて小突き始めた。

「さあ孰方や、返事しなさい、早う！ 早う！」

——さ

「何とまあ手荒な、……………」

「今夜はどないなことにしたかて堪忍<sup>かんにん</sup>せエしまへんで。さあ、早う！　早う！」

「えゝ、もう、シヨウがない、リ、遣つてしもたるわ。」

「ほんまだつかいな。」

「ほんまや。」

庄造は眼をつぶつて、観念の臍<sup>ほぞ</sup>を固めたと云ふ顔つきをした。

「——その代り、あと一週間待つてくれへんか。なあ、こないに云うたら又怒られるか知れへんけど、なんぼ畜生にしたかて、此処の家に十年もいてたもん、今日云うて今日追ひ出す訳に行くかいな。そやさかいに、心残りのないやうにせめてもう一週間置

いてやつて、たと好きなもの食べさせて、出来るだけのことしてやりたいねん。なあ、どないや？ お前かてその間ぐらゐ機嫌直して可愛がつてやりいな。猫は執念深いよつてにな。」

いかにも懸<sup>かけひき</sup>引のない真情らしく、さうしんみりと訴へられてみると、それには反対が出来なかつた。

「そしたら一週間だつせ。」

「分つてゐる。」

「手工出さない。」

「何や？」

と云つてゐる隙に、素早く指切りをさせられてしまつた。

「お母<sup>かあ</sup>さん」

それから二三日過ぎた夕方、福子が銭湯<sup>せんとう</sup>へ出かけた留守に、店番をしてゐた庄造は奥の間へ声をかけながら這入つて来ると、自分だけの小さなお膳で食事してゐる母親の側へ、モヂくしなから中腰にかぐんだ。

「お母さん、ちよつと頼みがありまんねん。――」

毎朝別に炊<sup>た</sup>いてゐる土鍋の御飯の、お粥<sup>かゆ</sup>のやうに柔かいのがすっかり冷えてしまつたのを茶碗に盛つて、塩昆布を載せて食べてゐる母親は、お膳の上へ背を円々と蔽<sup>おほ</sup>ひかぶさるやうにしてゐた。

「あのなあ、福子が急にリ、嫌ひや云ひ出してなあ、品子んとこへ遣つてしまへ云ひまんね。……」

「此のあひだ、えらい騒ぎしてたやないか。」

「お母さん知つてなはつたんか。」

「夜中にあんな音さすよつて、わてびつくりして、地震か思つたわ。あれ、そのことでかいな？」

「さうだんが。これ見て御覧、——」

と、庄造は両腕を突き出して、シャツの袖をまくり上げた。

「これ、そこらぢゆうみみずばれ蚯蚓脹あざや痣だらけだ。顔にかて此れ、まだ痕残あとつてるやろ。」

「何でそんなことしられたんや？」

「焼餅だんが。——阿呆らしい、猫可愛がり過ぎる云うて焼餅やくもん、何処の国にあるか知らん、氣違ひ沙汰や。」



「品子かてよう何の彼<sup>か</sup>んの云うてたやないか。お前みたいに可愛がつたら、誰にしたかて焼餅ぐらゐ起すわいな。」

「ふうん、——」

幼い時から母親に甘える癖がついてゐるのが、此の歳になつてもまだ抜け切れない庄造は、だゞツ児<sup>こ</sup>のやうに鼻の孔<sup>あな</sup>を膨<sup>ふく</sup>らがして、さも面白くなさうに云つた。

「——お母さん福子のこと云うたら、味方ばかりするねんなあ。」

「けどお前、猫であらうと人間であらうと、外のもん可愛がつてゝ、来たばかりの嫁のこと思つてやらなんだら、氣イ悪うするのん当り前やで。」

「そら可笑<sup>おか</sup>しい。僕、いつかて福子のこと想着まんが。一番大事にしてまんが。」

「さうに違ひないのんやつたら、ちよつとぐらゐの無理聴いてやりいな。わてあの娘<sup>こ</sup>からもその話聞かされてるねんが。」

「それ、いつのことだんね？」

「昨日そない云うてなあ、——リ、——いてたらよう辛抱せんさかい、五六日うちに品子の方へ渡すことに、もうちやんと約束したある云ふねんけど、ほんまかいな。」

「それや。——したことはしたけど、そんな約束実行せんかて済むやうに、何とかそこんとこ、あんぢよう云うて貰へんやろか。僕お母さんにそれ頼まう思うてゝん。」

「さうかて、約束通りしてくれなんだから、去なして貰ふ云うてるねんで。」

「威嚇<sup>おどか</sup>しや、そんなこと。」

「威嚇<sup>おどか</sup>しかも知れんけど、そないまでに云ふもん聴いてやつたらどないや？ 又うるさいで、約束<sup>たが</sup>違へたら。——」

庄造は酸<sup>す</sup>っぱいやうな顔をして、口を尖<sup>とが</sup>らせて俯<sup>うつむ</sup>向いてしまった。母から云はせて福子を宥<sup>なだ</sup>める目算<sup>もくさん</sup>でゐたのが、すっかり外れてしまったのである。

「あの娘<sup>こ</sup>あんな氣象やよつてに、ほんまに逃げて行くかも知れん。それもえゝけど、嫁を放つといて猫可愛がるやうなところ<sup>むすめ</sup>へ内の娘遣<sup>や</sup>つとけん！ 云はれたらどないする？ お前よりわてが困るわ

いな。」

「そしたら、お母さんもり、追ひ出してしまへ云やはりまんのか。」

「そやさかいにな、兎に角こゝのとはあの娘の氣持濟むやうに、一遍うツと品子の方へ遣つてしまひいな。そないしといて、えゝ折を見て、機嫌直つた時分に取り戻すこと出来んもんかいな。――」

そんな、渡してしまつたものを先方が返す筈もなし、受け取る筋でもないことは分つてゐながら、庄造が母親に甘えるやうに、母親も見え透いた氣休めを云つて、子供を賺<sup>すか</sup>すやうな風に庄造をあやなす癖があつた。そして彼女は、いつでも結局此の忤<sup>せがれ</sup>を自分の

思ひ通りに動かしてゐるのだつた。

もう若い者はセルを着出した頃なのに、<sup>あわせ</sup> 衾の上に薄綿の這入つた

ジンベエを着て、メリヤスの足袋<sup>たび</sup>を穿いてゐる彼女は、小柄で、

痩せてゐて、生活力の衰へきつた老婆のやうに見えるけれども、

頭の働きは案外確かで、云ふことやすすることにソツがないので、

「息子よりも婆さんの方がしつかりしてゐる」と、近所ではさう

云ふ評判だつた。品子が追ひ出されたのも、実は彼女が糸を操<sup>あやつ</sup>つ

たからなので、庄造にはまだ未練があつたのだと云ふ人もある。

それやこれやで、此の附近では母親を憎む者が多く、一般の同情

は品子の方に集まつてゐたが、彼女に云はせると、いくら姑の気

に入らない嫁でも、忤が好きなものならば、出る筈もないし出せ

る訳もない、やつぱりあれは庄造に飽かれたからだと云ふ。なるほどそれもさうだけれども、彼女と福子の父親が手を貸さなければ、庄造一人であの女房をいびり出す勇氣はなかつたと云ふのが、間違ひのない事実であつた。

いつたい母親と品子とは、どう云ふものか初めから反りが合はなかつた。勝気な品子は、落ちどを拾はれないやうに氣を附けて、随分姑には勤めてゐたけれども、さう云ふ風に抜け目なく立ち廻つて行かれることが、又母親の癢しやくさわに触つた。うちの嫁は何処と云つて悪いところはないやうなものゝ、何だか親身しんみに世話をして貰ふ氣になれない、それと云ふのが、心から年寄を労いたはつてやらうと云ふ優しい情愛がないからなのだ、母親はよくさう云つたが、

つまり嫁も姑も、孰方どちらもしつかり者だつたのが不和の原因になつたのである。それでも一年半ばかりの間は、表面だけは無事に治まつてゐたのだつたが、その時分から母親のおりんは嫁が面白くないと云つて、始終今津いまづの兄の所、庄造には伯父に当る中島の家へ泊まりに行つて、二日も三日も歸つて来ないやうになつた。あまり逗とまりゆう留りゆうが長いので、品子が様子を見に行くと、お前は歸つて庄造を迎ひに寄越せと云ふ。庄造が行くと、伯父や福子までが一緒になつて引き止めて、晩になつても歸してくれない。それには何か魂胆こんたんがあるらしいことは、庄造もうす／＼気が付いてゐながら、甲子園の野球だの、海水浴だの、阪神パークだのと、福子に誘はれるまゝに、何処へでもふら／＼と喰つ着いて行つて、

呑氣のんきに遊んでゐるうちに、とう／＼彼女と妙な仲になつてしまつた。

此の伯父と云ふのは菓子かしの製造販売をしてゐて、今津の町に小さな工場を持つてゐたばかりでなく、国道沿線に五六軒の家作かやくを建てたりして裕福に暮らしてゐたのだつたが、福子のことでは大分だいぶ今迄に手を焼いてゐた。母親が早く亡くなつたせもあるものだらうが、女学校を二年の途中で止めさせられたか、勝手に止めてしまつたかしてから、さつぱり尻しりが落ち着かない。家出をしたことも二度ぐらゐあつて、神戸の新聞に素ツ葉すは抜かれたりしたものだから、縁付けようと思つても中々貰ひ手がなかつたし、自分も窮屈な家庭などへは行きたくない。そんなこんなで、何とか早く身



を固めさせなければと、父親が焦<sup>あせ</sup>つてゐる事情に眼を付けたのが  
おりんであつた。福子は自分の娘のやうなもので、気心はよく分  
つてゐるから、アラがあることは差<sup>さ</sup>支<sup>し</sup>へない、品<sup>ひん</sup>行<sup>こう</sup>の悪いの  
は困るけれども、もうそろ／＼分別が出てもいゝ歳<sup>とし</sup>だから、亭主  
を持つたらまさか浮気をすることもあるまい、それにそんなこと  
は大した問題でないと云ふのは、此の娘にはあの国道の家作が二  
軒附いてゐて、そこから上る家賃が六十三円になる。おりんの計  
算だと、父親がそれを福子の名義に直したのが二年も前のことで  
あるから、その積立が元金だけでも一千五百十二円ある、それだ  
けのものは持参金として持つて来る上に、月々今の六十三円が這  
入るとすると、それらを銀行へ預けておいたら、十年もすれば一<sup>ひ</sup>

と財産出来るので、これが何よりの附けめであつた。

もつと

尤も彼女は古い先の短かい体であるから慾張つたところで仕方がないが、甲斐性かいしようのない庄造が此の先どうして凌しのいで行くつもり

か、それを考へると安心して死んで行けないのであつた。何しろ

蘆屋の旧国道は、

阪はん急きゅう

の方が開けたり新国道が出来たりして

から、年々さびれつゝあるので、こんなところではいつ迄荒物屋渡と

世せい

をしてゐても思はしい訳はないのだけれど、動くには此の店を

売り退のかなければならないし、さて売り退いても何処で何を始め

ようと云ふ成算がない。庄造はそんなことについてひどく呑氣に

生れつゝいた男で、貧乏を苦にしない代りには、一向商売に身を入れない。十三四の頃、夜学へ通ひながら西宮の銀行の給仕に使は

あおぎ

れ、青木のゴルフ練習場のキャディーにも雇はれ、年頃になつてからはコツクの見習を勤めたりしたけれど、何処も長つゞきがしないで怠けてゐるうちに父親が亡くなつて、それから此方こちら荒物業の亭主で納まつてしまつた。ぜんたい店の商売などは母親に任して置いて、兎に角男一匹が何かしら職を求めたらよいのに、国道筋でカフエエを始めたいからと伯父に出資を申し込んで、意見されたことがあつた外には、猫を可愛がることゝ、球たまを撞つくことゝ、盆栽ぼんさいをいぢくることゝ、安カフエエの女をからかひに行くことゝ、ぐらゐより、何の仕事も思ひ付かない。さうして今から足かけ四年前、二十六の歳に畳屋の塚本を仲人に立てゝ、山蘆屋の或る邸に奉公してゐた品子を嫁に貰つたのだが、その時分から商売の方

がいよく上つたりになつて、毎月の遣り繰りに骨が折れて来た。親の代から蘆屋に住んでゐるお蔭で、ながねん長年の顔があるところから、しばら暫くは無理が利きいたけれども、つぽ坪十五銭の地代が二年近くも滞とどこおつて、百二三十円にもなつてゐるのは、どうにも返済の見込みが立たない。で、もう庄造をアテにしないことにきめた品子は、仕立物などを頼まれたりして暮らしの補ひをつけてゐたばかりか、折角お給金を溜めて一通り拵へて来た荷物にさへ手をつけて、僅かの間に減らしてしまつた。そんな訳だから、今更その嫁を追ひ出さうと云ふのは無慈悲な話で、近所の同情が彼女の方へ集まつたのも当然であるが、おりんにしてみれば、背に腹は換へられなかつたし、こだね子種のないと云ふことが難癖をつけるのに都合が好か

つた。それに福子の父親迄が、さうすれば娘の身が固まるし、甥おいの一家を救つてもやれるし、双方のためだと考へたのが、おりんの工作に油を注ぐ結果となつた。

それ故福子ゆえが庄造と出来てしまつたのには、父親やおりんの取り持ちがあつたに違ひないのであるが、一体そんなことがなくとも、庄造は割りに誰にでも好かれるたちであつた。別に美男子などではないが、幾つになつても子供つぽいところがあつて、氣だてが優しいせゐかも知れない。キャデーの時代にはゴルフ場へ来る紳士や夫人たちに可愛がられて、盆暮ぼんくれの附け届を誰よりも余計貰つたし、カフェエなどでも案外持てるので、僅かなお金で長く遊んで来ることを覚えてしまひ、そんなところからのらくらの癖

がついたのだつた。が、何にしてもおりんから云へば、自分がいろ／＼細工をしてやつと我が家へ迎へ入れる迄に漕ぎ付けた、持参金附きの嫁御寮であるから、尻の軽い彼女に逃げられないやうに、忤と二人で精々機嫌を取らなければならぬ訳で、猫のことなどは勿論始めから問題でなかつた。いや、実を云ふと、おりんも内々猫には閉口してゐたのであつた。元来リ、ーと云ふ猫は、神戸の洋食屋に住み込んでゐた庄造が歸つて来る時に連れて来たのだが、これがあるために家の中が汚れること夥しい。庄造に云はせると、此の猫は決して粗そでうをしない、用をする時は必ずフンシへ這入ると云ふ。いかにもその点は感心だけれど、戸外にゐてもわざ／＼フンシへ這入るために戻つて来ると云ふ調子なので、

フンシが非常に臭くなつて、その悪臭が家中に充満するのである。おまけに臀しりの端はたへ砂を着けたまゝ歩き廻るので、畳がいつもザラ／＼になる。雨の日などは臭が一層強く籠こもつてむツとするところへ持つて来て、おもてのぬかるみを歩いたまゝで上つて来るから、猫の脚あとが此処ここ彼処かしこに点々とする。庄造は又、此の猫は戸でも襖ふすまでも障子でも、引き戸でさへあれば人間と同じに開ける、こんな賢いのは珍しいと云ふ。だが畜生の浅ましきには、開けるばかりで締めることを知らないから、寒い時分には通つたあとを一々締めて廻らなければならない。それもいゝけれども、そのために障子は穴だらけ、襖や板戸は爪の痕だらけになる。それから困るのは、生なまもの物、煮物、焼物の類をうつかりその辺へ置くことが出

来ない、ぼんやりしてゐると直ぐ食べられてしまふので、お膳立てをするほんの僅かな間でも、水屋かはいちよう蠅帳へ一応入れて置かなければならない。いや／＼、もつとひどいことは、此の猫は臀の始末はよいが、口の始末が悪くて、とき／＼嘔吐するのである。それと云ふのは、庄造が例の曲藝に熱中して幾らでも餌を投げてやるので、つい食ひ過ぎるせみなのであるが、晩飯の後でチヤブ台を除けると、その辺に一杯毛が落ちてゐて、食ひかけの魚の頭だの尻尾だのがたくさん散らばつてゐるのである。

品子が嫁に来る迄は、台所の世話や拭き掃除は一切おりんの役だったから、リ、ーのために随分泣かされてゐる訳なのだが、今日まで我慢してゐたのは一つの出来事があつたからだつた。と云



ふのは、たしか五六年前に、無理に庄造を説き付けて、一度此の猫を尼ヶ崎の八百屋へ遣つたことがあつたが、やがて一と月もした時分に、或る日ヒヨツコリ蘆屋の家へ独りで歸つて来たのである。犬なら不思議はないけれども、猫が前の主人を慕つて五六里の道を戻つて来るとは、あまりイヂラシイ話なので、それ以来庄造の可愛がりやうは旧に倍したのみならず、おりんも流石に不憫を感じたのか、或は多少薄気味悪く思つたのか、もうそれからは何も云はないやうになつた。そして品子が来てからは、福子と同じ理由から、——と云ふのは嫁をいぢめるために、却つてり、——の存在が便利を与へることがあるので、やさしい言葉の一つぐらゐは時々かけてやつてゐたのである。だから庄造は、その母親

までが突然福子の味方をし出した様子を見ては、心外でたまらないのであつた。

「けど、リ、ーやつたら遣<sup>や</sup>つたかて又戻つて来まつせ。なんせ尼ヶ崎からでも戻つて来る猫やさかいにな。」

「ほんになあ、今度はまるきり知らん人やあれへんよつて、そこは何とも分らんけど、戻つて来たら又置いてやつたらえゝがな。ま、兎も角も遣つてみてみいな。——」

「あゝ、どうしよう、困つたなあ。」

庄造は頻りに溜息をついて、まだ何かしら粘<sup>ねば</sup>つてみようとしてゐたが、その時おもてに足音がして、福子が風呂から歸つて来た。

「塚本君、分つてまんなあ？　これ、なるべくそつと持つて行かんと、乱暴に振つたらあきまへんで。猫かて乗物に酔ふさかいになあ。」

「そない何遍も云はんかて、分つてまんが。」

「それから、此れや、」

と、新聞紙にくるんだ、小さな平べつたい包みを出して、

「実はなあ、いよくこれがお別れやさかいに、出がけに何ぞおいしいもん食べさしてやりたい思ひまんねんけど、乗物に乗る前に物食べさしたら、えらい苦しみまんねん。それでなあ、此の猫<sup>かしわ</sup>の肉が好きやよつてに、僕、自分でこれ買<sup>こ</sup>うて来て、水煮<sup>みずだ</sup>きにしましたさかい、彼方<sup>あっち</sup>へ着いたら直<sup>じ</sup>き食べさしてやるやうに

云うとくなはれしまへんか。」

「よろしおます。あんどよう持つて行きますよつて安心しなはれ。

——そんなら、もう用事おまへんか。」

「ま、ちよつと待つとくなはれ。」

さう云ふと庄造は、バスケットの蓋を開けて、もう一度しつかり抱き上げて、

「リ、ー」

と云ひながら頬擦りをした。

「お前な、彼方へ行つたらよう云ふこと聴くんやで。彼方のあの<sup>せん</sup>人、もう先<sup>せん</sup>みたいにいぢめたりせんと、大事にして可愛がつてくれるさかいに、ちよつとも恐いことないで。えゝか、分つたなあ。

抱かれることが嫌ひなり、ーは、あまり強く締められたので脚をバタ／＼やらししたが、バスケットの中へ戻されると、二三度周囲を突ツついてみたゞけで、とても出られないとあきらめたらしく、急に静まり返つてしまつたのが、ひとしほ哀れをそゝるのであつた。

庄造は、国道のバスの停留所まで送つて行きたかつたのであるが、今日から当分の間、風呂へ行く以外は一步も外出してはならぬと、女房から堅く止められてゐるので、バスケットを提げた塚本が出て行つたあと、氣抜けがしたやうにぽつねんと店にすわつてゐた。福子が外出を禁じた訳は、リ、ーの様子を氣遣ふ余りついふら／

と品子の家の近所ぐらゐまで行くかも知れないからであつたが、事実庄造自身にも、さう云ふ懸念けねんがないことはなかつた。そして此の迂濶うかつな夫婦は、猫を渡してしまつてから、始めて品子のほんたうの腹が分りかけて来たのである。

成る程、リ、リをおとり囿おれに己を呼び寄せようと云ふ氣だつたのか。あの家の近所をうろくしたら、掴つかまへて口説き落さうとでも云ふのか。——庄造はそこへ氣がついてみると、いよく品子の陰險さ加減が憎くなつたが、そんな道具に使はれるリ、リの身の上に、一層可哀さが増して来た。唯一の望みは、尼ヶ崎から逃げて歸つて来たやうに、阪急の六甲ろっこうにある品子の家から逃げて来はせぬかと云ふことであつた。実は水害の後の仕事で忙しい塚本が、

夜<sup>よ</sup>受け取りに来ると云つたのを、朝にして貰つたのも、明るい時に連れて行かれたら道を覚えてゐるであらう、さうしたら逃げて来るのも容易であらうと、そんな心積りがあつたからだが、それにつけても思ひ出されるのは、此の前、尼ヶ崎から戻つて来たあの朝のことだつた。何でもあれは秋の半ば時分であつたが、或る日、やうく夜が明けたばかりの頃、眠つてゐた庄造は「ニヤア」「ニヤア」と云ふ耳馴れた啼き声に眼を覚ました。その時分は独身者の庄造が二階に寝、母親が階<sup>した</sup>下に寝てゐたが、朝が早いのでまだ雨戸が締まつてゐるのに、つい近いところで「ニヤア」「ニヤア」と猫が啼いてゐるのを、夢うつゝのうちに聞いてゐると、どうもりゝゝの声のやうに思へて仕方がない。一と月も前に尼ヶ

崎へ遣つてしまつたものが、まさか今頃こんな所にある筈はないが、聞けば聞くほどよく似てゐる。バリ／＼と裏のトタン屋根を踏む音がして、直ぐ窓の外に来てゐるので、兎に角正体を突き止めようと急いで跳ね起きて、窓の雨戸を開けてみると、つい鼻の先の屋根の上を往つたり来たりしてゐるのが、たいそう窶やつれてはゐるけれどもリ／＼に違ひないのであつた。庄造はわが眼を疑ふ如く、

「リ／＼」

と呼んだ。するとリ／＼は

「ニヤア」

と答へて、あの大きな眼を、さも嬉しげに一杯に開いて見上げな



がら、彼が立つてゐる肘掛窓の真下まで寄つて来たが、手を伸ばして抱き上げようとすると、体<sup>たい</sup>を躲<sup>かわ</sup>してすうツと二三尺<sup>しゃく</sup>向うへ逃げた。しかし決して遠くへは行かないで、

「リハー」

と呼ばれると、

「ニヤア」

と云ひながら寄つて来る。そこを掴まへようとすると、又する／＼と手の中を脱けて行つてしまふ。庄造は猫のかう云ふ性質がたまらなく好きなのであつた。わざ／＼戻つて来るくらゐだから、余程恋ひしかつたのであらうに、そのなつかしい家に着いて、久しぶりで主人の顔を見たのでありながら、抱かうとすれば逃げて

しまふ。それは愛情に甘えるしぐさのやうでもあるし、暫く会はなかつたのがキマリが悪くて、羞<sup>はにか</sup>んでゐるやうでもある。リ、―はさう云ふ風にして、呼ばれる度に「ニヤア」と答へつゝ屋根の上をうろくした。庄造は、彼女が痩せてゐることは最初から気が付いてゐたけれど、なほよく見ると、一と月前よりは毛の色つやが悪くなつてゐるばかりでなく、頸の周りだの尾の周りだのが泥だらけになつてゐて、ところ／＼に薄<sup>すすき</sup>の穂などが喰つ着いてゐた。貰はれて行つた八百屋の家も猫好きだと云ふ話であつたから、虐待されてゐた筈はないので、これは明かに、一匹の猫が尼ヶ崎から此処までひとりで辿つて来る道<sup>どうちゆう</sup>中の難儀を語るものだつた。こんな時刻に此処へ着いたのは、昨夜ぢゆう歩きつゞ

けたのに違ひないけれども、多分一と晩ぐらゐではあるまい、もう幾晩もく、恐らくは数日前に八百屋の家を逃げ出して、方々で道に迷ひながら、やうく此処まで来たのであらう。彼女が人家つゞきの街道を一直線に来たのではないことは、あのすゞきの穂を見て分る。それにしても、猫は寒がりなものであるのに、朝夕の風はどんなに身に沁しみたことであらう。おまけに今は村しぐれの多い季節でもあるから、定めし雨に打たれて叢くさむらへもぐり込んだり、犬に追はれて田圃たんぼの中へ隠れたりして、食ふや食はずの道中をつづけて来たのだ。さう思ふと、早く抱き上げて撫で、やりたくて、何度も窓から手を出したが、そのうちにり、りの方も、羞澁みながらだんく体を擦り着けて来て、主人の為なすが儘ままに任

せた。

その時のリ、ーは、一週間ほど前から尼ヶ崎の方で姿を見なくなつてゐたことが、後に問ひ合はせて知れたのであつたが、今も庄造は、あの朝の啼きなごゑと顔つきとを忘れることが出来ないのである。そればかりでなく、此の猫についてはまだ此の外にも数々の逸話があつて、あの時はあんな顔をした、あんな声を出したと云ふ記憶が、いろいろの場合に残つてゐるのである。たとへば庄造は、初めて此の猫を神戸から連れて来た日のことをはつきりと思ひ出すのであるが、それは最後に奉公をしてゐた神港軒から暇を貰つて蘆屋へ歸つた時であるから、彼がちやうど二十歳はたちの年、つまり父親が亡くなつた年の、四十九日の頃だつた。その前彼は、

三毛猫を一度、それが死んでからは「クロ」と呼んでゐた真つ黒な雄猫を、コツク場で飼つてゐたのであるが、そこへ出入の肉屋から、歐洲種の可愛らしいのがゐるからと云つて、生後三ヶ月ばかりになる雌の仔猫を貰つたのが、リ、ーだつたのである。それで暇を貰ふ時にもクロはコツク場へ置いて来てしまつたが、仔猫の方は手放すのが惜しくて、行李こよりと一緒に或る商店のリヤカーの隅へ積んで貰つて、蘆屋の家へ運んだのであつた。

肉屋の主人の話だと、英吉利人イギリスじんはかう云ふ毛並みの猫のことを鼈べ甲つこうねこと云ふさうであるが、茶色の全身に鮮明な黒の斑点が行き

互わたつてゐて、つや／＼と光つてゐるところは、成る程研いた鼈甲の表面に似てゐる。何にしても庄造は、今日までこんな毛並みの

立派な、愛らしい猫を飼つたことがなかつた。ぜんたい歐洲種の猫は、肩の線が日本猫のやうに怒<sup>いか</sup>つてゐないので、撫<sup>な</sup>で肩<sup>がた</sup>の美人を見るやうな、すつきりとした、イキな感じがするのである。顔も日本種の猫だと一般に寸が長くつて、眼の下あたりに凹<sup>くぼ</sup>みがあったり、頬の骨が飛び出てゐたりするけれども、リ、ーの顔は丈が短かく詰まつてゐて、ちやうど蛤<sup>はまぐり</sup>を倒<sup>かさ</sup>まにした形の、カツキリとした輪郭の中に、すぐれて大きな美しい金<sup>きん</sup>眼<sup>め</sup>と、神経質にヒク／＼<sup>うご</sup>蠢<sup>うご</sup>めく鼻が附いてゐた。だが庄造が此の仔猫に惹き附けられたのは、さう云ふ毛なみや顔だちや体つきのためではなかつた。もしも外形だけで云ふなら、庄造だつてもつと美しい波<sup>へ</sup>斯<sup>る</sup>猫<sup>しゃむ</sup>だの暹羅猫だのを知つてゐるが、でも此のリ、ーは性質が実に愛ら

しかつた。蘆屋へ連れて来た当座は、まだほんたうに小さくて、  
掌てのひらの上へ乗る程であつたが、そのお転婆でやんちゃなことは、と  
んと七つか八つの少女、——いたづら盛りの、小学校一二年生  
ぐらゐの女の児こと云ふ感じだつた。そして彼女は今よりもずつと  
身軽で、食事の時に食物を摘まんで頭の上へ翳かざしてやると、三四  
尺の高さまで跳び上つたので、すわつてゐては直ぐ跳び着かれて  
しまふから、しばゝ食事の最中に立ち上らねばならなかつた。  
彼はその時分からあの曲藝を仕込んだのであるが、箸の先に摘ま  
んだ物を、三尺、四尺、五尺、と云ふ風に、跳び着く毎にだん／  
＼高くして行くと、しまひには着物の膝へ跳び着いて、胸から肩  
へすばしツこく這ひ上つて、鼠はりが梁を渡るやうに、箸の先まで腕

を渡つて行つたりした。或る時などは店のカーテンに跳び着いて、天井の方までクル／＼と這ひ上つて、端から端へ渡つて行つて、又カーテンに掴まつて降りて来る、——そんな動作を水車のやうに繰り返した。それに、さう云ふ幼い時から非常に表情が鮮やかで、眼や、口元や、小鼻の運動や、息づかひなどで心持の変化をあらはすことは、人間と少しも違はなかつた。就中なかんずくそのばつちりした大きな眼球は、いつも生き／＼とよく動いて、甘える時、いたづらをする時、物に狙ひを付ける時、どんな時でも愛くるしさを失はなかつたが、一番可笑おかしいのは怒る時で、小さい体をしてゐる癖に、やはり猫なみに背を円くして毛を逆立て、尻尾をピンと跳ね上げながら、脚を踏ん張つてぐつと睨まへる恰好と



云つたら、子供が大人の真似をしてゐるやうで、誰でもほゝ笑んでしまふのであつた。

庄造は又、リ、ーが初めてお産をした時の、あの訴へるやうなやさしい眼<sup>まなざし</sup>差を、忘れることが出来ないものであつた。それは蘆屋へ連れて来てから半年ほど過ぎた時分であつたが、或る日の朝、産氣<sup>さんけ</sup>づいた彼女はしきりにニヤア／＼云ひながら彼の後を追つて歩くので、サイダの空<sup>あ</sup>き函<sup>ばこ</sup>へ古<sup>ざぶとん</sup>い座布団を敷いたのを押入の奥の方に据ゑて、そこへ抱いて行つてやると、暫くの間は函に這入つてゐるけれども、直きに襖を開けて出て来て、又啼きながら追ひかける。その啼きごゑは今まで彼が聞いたことのない声だつた。

「ニヤア」とは云つてゐるのだが、その「ニヤア」の中に、今ま

での「ニヤア」が含んでゐなかつた異様な意味が籠つてゐた。まあ云つてみれば、「あゝどうしたらいいでせう、何だか急に体の工合が変なのです、不思議な事が起りさうな予感がします、こんな気持はまだ覚えがありません、ねえ、どうしたと云ふのでせう、心配なことはないのでせうか？」——と、さう云ふやうに聞えるのであつた。でも庄造が、

「心配せんかてえゝねんで。もう直きお前、お母さんになるねんが。……」

と、さう云つて頭を撫でゝやると、前脚を膝へ乗せて来て、すが縋り着くやうな様子をして、

「ニヤア」

と云ひながら、彼の言葉を一生懸命理解しようとするかのやうに、眼の球をキヨロ／＼させた。それからもう一度押入の所へ抱いて行つて、函の中へ入れてやつて、

「えゝか、此処にじつとしてるねんで。出て来たらあかんで。えゝなあ？ 分つてるなあ？」

と、しんみり云つて聴かせてから、襖を締めて立たうとすると、  
「待つて下さい、何卒<sup>どうぞ</sup>そこにゐて下さい」とでも云ふやうに、又

「ニヤア」

と云つて悲しげに啼いた。だから庄造もついその声に絆<sup>ほど</sup>されて、細目に開けて覗いてみると、行李<sup>こうり</sup>だの風呂敷包みだのいろ／＼な荷物が積んである押入の、一番奥の突きあたりにある函の中から

首を出して、

「ニヤア」

と云つては此方を見てゐる。畜生ながらまあ何と云ふ情愛のある眼つきであらうと、その時庄造はさう思つた。全く、不思議のやうだけれども、押入の奥の薄暗い中でギラ／＼光つてゐるその眼は、最早<sup>もは</sup>やあのいたづらな仔猫の眼ではなくなつて、たつた今の瞬間に、何とも云へない媚<sup>こ</sup>びと、色気<sup>いろけ</sup>と、哀愁とを湛へた、一人前の雌の眼になつてゐたのであつた。彼は人間の女のお産を見たことはないが、もしその女が年の若い美しい人であつたら、きつと此の通りの、恨めしいやうな切ないやうな眼つきをして、夫を呼ぶに違ひないと思つた。彼は幾度も襖を締めて立ち去りかけて

は、又戻つて来て覗いてみたが、その度毎にリ、ーも函から首を出して、子供が「居ないくばあ」をするやうに此方を見た。

さうしてそれが、もう十年も前のことなのである。而も品子しかが嫁に來たのがやうく四年前であるから、それまで六年の間と云ふもの、庄造は蘆屋の家の二階で、母親の外にはたゞ此の猫を相手にしつゝ暮らしたのである。それにつけても猫の性質を知らない者が、猫は犬よりも薄情であるとか、不愛想ぶあいそうであるとか、利己主義であるとか云ふのを聞くと、いつも心に思ふのは、自分のやうに長い間猫と二人きりの生活をした経験がなくて、どうして猫の可愛らしさが分るものか、と云ふことだつた。なぜかと云つて、猫と云ふものは皆幾分か羞澁はにかみやのところがあるので、第三者が

見てゐる前では、決して主人に甘えないのみか、へんに余所々々よそよそしく振舞ふのである。リ、ーも母親が見てゐる時は、呼んでも知らんふりをしたり、逃げて行つたりしたけれども、さし向ひになると、呼びもしないのに自分の方から膝へ乗つて来て、お世辞を使つた。彼女はよく、額を庄造の顔にあてゝ、頭ぐるみぐいぐいと押して来た。さうしながら、あのザラ／＼した舌の先で、頬だの、頤あごだの、鼻の頭だの、口の周りだのを、所嫌はず舐め廻した。夜は必ず庄造の傍に寝て、朝になると起してくれたが、それも顔ぢゆうを舐めて起すのであつた。寒い時分には、掛け布団の襟をくゞつて、枕の方からもぐり込んで来るのであつたが、寝勝手のよい隙間を見付け出す迄は、懷の中へ這入つてみたり、股ぐらの

方へ行つてみたり、背中の方へ廻つてみたりして、やう／＼或る場所に落ち着いても、工合が悪いと又直ぐ姿勢や位置を変へた。

結局彼女は、庄造の腕へ頭を乗せ、胸のあたりへ顔を着けて、向ひ合つて寝るのが一番都合がよいしかつたが、もし庄造が少しでも身動きをすると、勝手が違つて来ると見えて、そのつど体をもぐ／＼させたり、又別の隙間を搜したりした。だから庄造は、彼女に這入つて来られると、一方の腕を枕に貸してやつたまゝ、なるべく体を動かさないやうに行儀よく寝てゐなければならなかつた。そんな場合に、彼はもう一方の手で、猫の一番喜ぶ場所、あの頸くびの部分くびを撫でゝやると、直ぐにリ、ーはゴロ／＼云ひ出した。そして彼の指に噛み着いたり、爪で引つ搔いたり、涎よだれを垂ら

したりしたが、それは彼女が興奮した時のしぐさなのであつた。

さう云へば一度庄造が布団の中で放屁を鳴らすと、その布団の上の裾の方に寝てゐたり、ゝが、びつくりして眼を覚まして、何か奇態な啼き声を出す怪しい奴が隠れてゐるとでも思つたのであらう、さも不審さうな眼をしながら、大急ぎで布団の中を捜し始めたことがあつた。又或る時は、嫌がる彼女を無理に抱き上げようとしたら、手から脱け出て、体を伝はつて降りて行く拍子に、非常に臭い瓦斯<sup>ガス</sup>を洩らしたのが、まともに庄造の顔にかゝつた。たしかその時は食事の後で、今御馳走を食べたばかりの、ハチ切れさうにふくらんだり、ゝのお腹を、偶然庄造が両手でギュツと押さへたのである。そして運悪くも、ちやうど彼女の肛門が彼の顔



の真下にあつたので、腸ちようから出る息が一直線に吹き上げたのだが、その臭かつたことゝ云つたら、いかな猫好きもその時ばかりは、「うわツ」

と云つて彼女を床へ放り出した。鼬いたちの最後ツ屁と云ふのも恐らくこんな臭さであらうが、全くそれは執拗な臭ひで、一旦鼻の先へこびり着いたら、拭いても洗つても、シャボンでゴシ／＼擦つても、その日一日ぢゆう抜けないのであつた。

庄造はよく、リ、リ、リのことと品子といさかひをした時分に、「僕リ、ーとは屁まで嗅かぎ合あうた仲や」などゝ、嫌味いやみめかして云つたものだが、十年の間も一緒に暮らしてゐたとすれば、たとひ一匹の猫であつても、因縁の深いものがあるので、考へやうでは、福

子や品子より一層親しいとも云へなくはない。事実品子と連れ添うてゐたのは、足かけ四年と云ふけれども正味は二年半ほどであるし、福子も今のところでは、来てからやつと一と月にしかならないのである。さうしてみれば長の年月を共にしてゐたり、一方が、いろいろな場合の回想と密接につながつてゐる訳で、つまり、――と云ふものは、庄造の過去の一部なのである。だから庄造は、今更手放すのが辛いのは当り前の人情ではないか、それを物好きだの、猫氣違ひだのと、何か大變非常識のやうに云はれる理由がないと思ふのであつた。そして福子の迫害と、母親の説教ぐらゐで、脆くも腰が挫けてしまつて、あの大切な友達をむぎく他人の手へ渡した自分の弱氣と腑甲斐なさ<sup>ふがい</sup>とが、恨めしくな

つて来るのであつた。何で自分はもつと正直に、男らしく、道理を説いてみなかつたのだらう。何で女房にも母親にも、もつと／＼剛情を張り通さなかつたのであらう。さうしたところで最後には矢張負かされて、同じ結果を見たかも知れぬが、でもそれだけの反抗もせずにしたつたのでは、リ、ーに対して如何にも義理が済まないものであつた。

もしもリ、ーが、あの尼ヶ崎へ遣つた時代にあれきり戻つて来なかつたとしたら？——あの時だつたら、彼も一旦<sup>いったん</sup>同意を与へて他家へ譲つたのであるから、きれいにあきらめもしたであらう。だがあの朝、トタン屋根の上で啼いてゐたのをやつと掴まへて、頬ずりをしながら抱き締めた瞬間に、あゝ、不憫なことをした、

己は残酷な主人だつた、もうどんなことがあつても誰にもやるものか、死ぬまで此処に置いてやるのだと、心に誓つたばかりでなく、リ、ーとも堅い約束をした氣持だつた。それを今度、又あんな風にして追ひ出してしまつたかと思ふと、非常に薄情な、むごいことをしたと云ふ感じが胸に迫つて来るのであつた。その上可哀さうなのは、此の二三年めつきり歳を取り出して、体のこなしや、眼の表情や、毛の色つやなどに、老衰のさまがあり／＼と見えてゐたのである。全く、それもその筈で、庄造が彼女をリヤカ―へ乗せて此処へ連れて来た時は、彼自身がまだ二十歳はたちの青年だつたのに、もう来年は三十に手が届くのである。まして猫の寿命から云へば、十年と云ふ歳月は、多分人間の五六十年に当るであ

らう。それを思へば、もう一と頃の元気がないのも道理であるとは云ふものの、カーテンの頂<sup>てっぺん</sup>辺へ登つて行つて綱渡りのやうな軽業<sup>かるわざ</sup>をした仔猫の動作が、つい昨日のことのやうに眼に残つてゐる庄造は、腰のあたりがゲツソリと痩せて、俯<sup>うつむ</sup>向き加減に首をチヨコ／＼振りながら歩く今日此の頃のり／＼を見ると、諸<sup>しよぎよ</sup>行<sup>うむじよう</sup>無常の理を手近に示された心地がして、云ふに云はれず悲しくなつて来るのであつた。

彼女がいかに衰へたかと云ふことを証明する事実はいくらもあるが、たとへば跳び上り方が下手になつたのもその一つの例なのである。仔猫の時分には、實際庄造の身の丈ぐらゐ迄は鮮やかに跳んで、過<sup>あやま</sup>たずに餌<sup>えさ</sup>を捉へた。又必ずしも食事の時に限らないで、

いつ、どんな物を見せびらかしても、直ぐ跳び上つた。ところが歳を取る毎に跳び上る度数が少くなり、高さが低くなつて行つて、もう近頃では、空腹な時に何か食物を見せられると、それが自分の好物であるか否かをたしかめた上で、始めて跳び上るのであるが、それでも頭上一尺ぐらゐの低さにしなければ駄目なのである。もしもそれより高くすると、もう跳ぶことをあきらめて、庄造の体を登つて行くか、それだけの気力もない時は、たゞ食べたさうに鼻をヒクヒクさせながら、あの特有な哀れっぽい眼で彼の顔を見上げるのである。「もし、どうか私を可哀さうだと思つて下さい。実はお腹がたまらないほど減つてゐるので、あの餌に跳び着きたいのですが、何を云ふにも此の歳になつて、とても昔のやう

な真似は出来なくなりました。もし、お願いです、そんな罪なことをしないで、早くあれを投げて下さい。」——と、主人の弱気な性質をすっかり呑み込んでゐるかのやうに、眼に物を云はせて訴へるのだが、品子が悲しさうな眼つきをしてもそんなに胸を打たれないのに、どう云ふものか、——の眼つきには不思議な傷ましさを覚えるのであつた。

仔猫の時にはあんなに快活に、愛くるしかつた彼女の眼が、いつからさう云ふ悲しげな色を浮かべるやうになつたかと云ふと、それがやつぱりあの初産の時からなのである。あの、押入の奥のサイドの函から首を出して術<sup>すべ</sup>なさうに見てゐた時、——あの時から彼女の眼差に哀愁の影が宿り始めて、そのうち老衰が加はる

ほどだん／＼濃くなつて来たのである。それで庄造は、とき／＼

リ、一の眼を視詰めながら、伶俐だと云つても小さい獣に過ぎないものが、どうしてこんな意味ありげな眼をしてゐるのか、何かほんたうに悲しいことを考へてゐるのだらうかと、思ふ折があつた。前に飼つてゐた三毛だのクロだのは、もつと馬鹿だつたせゐかも知れぬが、こんな悲しい眼をしたことは一度もない。さうかと云つて、リ、一は格別陰鬱な性質だと云ふのでもない。幼い頃は至つてお転婆だつたのだし、親猫になつてからだつて、相当に喧嘩も強かつたし、活潑に暴れる方であつた。たゞ庄造に甘えかゝつたり、退屈さうな顔をして日向ぼっこなどをしてゐる時に、その眼が深い憂ひに充ちて、涙さへ浮かめてゐるかのやうに、潤

うるお



ひを帯びて来ることがあつた。もつと尤もそれも、その時分にはなまめかしさの感じの方が強かつたのだが、年を取るに従つて、ぱつちりしてゐた瞳も曇り、眼のふちには眼脂めやにが溜つて、見るもトゲ／＼しい、露あらはな哀傷を示すやうになつたのである。で、これは事に依ると、彼女の本来の眼つきではなくて、その生ひ立ちや環境の空氣が感化を与へたのかも知れない、人間だつて苦勞をすると顔や性質が変るのだから、猫でもそのくらゐなことがないとは云へぬ、——と、さう考へると、尚なおよさら更庄造はリ、ーに濟まない氣がするのである。それと云ふのは、今迄十年の間と云ふもの、成る程随分可愛がつてはやつたけれども、いつでもたつた二人ぎりの、淋しい心細い生活ばかり味あじわはせて来たのであつた。何しろ

彼女が連れて来られたのは、母親と庄造と、親一人子一人の時代だつたから、とても神港軒のコツク場のやうに賑やかではなかつた。そこへ持つて来て母親が彼女をうるさがるので、悴と猫とは二階でしんみり暮らさなければならなかつた。さう云ふ風にして六年の歳月を送つた後に、品子が嫁に来たのであるが、それは結局、此の新しい侵入者から邪魔者扱ひされることになつて、一層リ、ーを肩身の狭い者にしてしまつた。

いや、もつとく済まないことをしたと思ふのは、せめて仔猫を置いてやつて、養育させればよかつたのに、仔が生れると成るべく早く貰ひ手を捜して分けてしまひ、一匹も家へ残さない方針を取つたのであつた。そのくせ彼女は実によく生んだ。外の猫が二

度お産をする間に、三度お産をした。相手は何処の猫か分らなかつたが、生れた仔猫たちは混血児あいのこで、鼈甲猫おもかげの倅を幾分か備へてゐるものだから、割合に希望者が多かつたけれども、時にはそうつと海岸へ持つて行つたり、蘆屋川の堤防の松の木蔭などへ捨て、来たりした。これは母親への気がねのためであることは云ふ迄もないが、庄造自身も、リ、ーが早く老衰するのは、一つは多産のせみかも知れぬ、だから妊娠を止めることが出来ないなら、乳を飲ませることだけでも控へさせた方がよいと、さう云ふ頭で取り計らひもしたのであつた。實際彼女は、お産の度毎に眼に見えて老けて行つた。庄造は、彼女がカンガル―のやうに腹を膨らして、切なげな眼つきをしてゐるのを見ると、

「阿呆やなあ、そないに何遍も腹ぼてになつたら、お婆さんになるばかりやないか。」

と、いつも不憫さうな口調で云つた。雄なら去勢して上げるが、雌では手術しにくいと云はれて、

「そんなら、エツキス光線かけとくなはれしまへんか。」

と、さう云つて獣医に笑はれたこともあつた。だが庄造にしてみれば、それやこれやも彼女のためを思つてのことで、無慈悲な扱ひをした積りではなかつたのだが、何と云つても、身の周りから血族を奪つてしまったことは、彼女をへんにうら淋しい、影の薄いものにしたことは否いなまれなかつた。

さう云ふ風に数へて行くと、彼は随分リ、ーに「苦勞」をかけた

と云ふ氣がするのである。彼の方が彼女のお蔭で慰められてゐるわりに、リ、ーの方は一向樂をしてゐないやうに思へるのである。殊に最近の一二年、夫婦の不和と生計の困難とで始終家の中がゴタ／＼してゐた間、リ、ーもそれに捲き込まれて、どうしたらよいか身の置きどころがないやうに狼狽<sup>うろた</sup>へてゐたことがあつた。母親が今津の福子の家から迎ひを寄越して、庄造に呼び出しをかけたりすると、品子より先にリ、ーが彼の裾へ縋つて、あの悲しい眼で引き止めたりした。それでも振り切つて出て行くと、犬のやうに後を追ひかけて、一丁も二丁も附いて來た。だから庄造も、品子のことよりは彼女のことを心配になつて、なるべく早く歸るやうにしたのであつたが、二日も三日も泊まつて來た時などは、

気のせゐるかも知れぬが、その眼の色に又一段と暗い影が添はつてゐた。

もう此の猫も余命幾いくばく何もないのではないか、——と、此の頃になつて彼はしば／＼そんな予感を覚えるにつけ、さう云ふ夢を見たことも一度や二度ではないのであつた。その夢の中の庄造は、親兄弟に死に別れでもしたやうな悲嘆に沈み、涙で顔を濡らしてゐるのだが、もしほんたうにリ、ーの死に遭ふことがあつたら、彼の嘆き方は夢の中のそれにも劣らないやうな気がするのである。で、そんな工合にそれからそれへと考へ始めると、彼女をおめ／＼譲つてしまつたことが、又もう一度口惜しく、情なく、腹立たしくなつて来るのであつた。そして彼女のあの眼つきが、何処か

の隅から恨めしさうに此方を見てゐるやうに思へて仕方がなかつた。今更悔んでも追つ付かないことだけれども、あんなに老衰してゐたものを、なぜむごたらしく追ひ遣つてしまつたのだらう。なぜ此の家で死なしてやらなかつたのだらう。……

「あんた、何で品子さんあの猫欲しがつてたのんか、その訳分つてなはるか。——」

その日の夕方、例になくひつそりとしたチャブ台に向つて、しよんぼり杯のふちを舐めてゐる亭主を見ながら、福子が照れ臭さうな調子で云ふと、

「さあ、何でやろ。」

と、庄造はちよつと空<sup>そらとぼ</sup>惚けた。

「リ、ー自分のところへ置いといたら、きつとあんたが会ひに来るやろ云ふところやねん。なあ、さうだつしやろが。」

「まさか、そんな阿呆らしいこと、………」

「きつとさうに違ひないねん。わて今日やつと氣イ付いたわ。あんたその手に乗らんやうにしとくなはれや。」

「分つてる、誰が乗るかいな。」

「きつとやなあ？」

「ふふ」

と庄造は鼻の先で笑つて、

「念押すまでもないこつちやないか。」

と、又杯のふちを舐めた。



今日は忙しおますさかいに、もう上らんと帰りますわと、玄関先にバスケツトを置いて、塚本が出て行つてしまつてから、品子はそれを提げたまゝ狭い急な段梯子を上つて、自分の部屋に当てられた二階の四畳半に這入つて行つた。そして、出入口の襖だのガラス障子だのをすつかり締め切つてしまつてから、バスケツトを部屋のまん中に据ゑて、蓋を開けた。

奇妙な事に、リ、ーは窮屈な籠の中から直ぐには外へ出ようとせず、不思議さうに首だけ伸ばして暫く室内を見廻してゐた。それから漸く、ゆる／＼とした足どりで出て来て、かう云ふ場合に多くの猫がするやうに、鼻をヒクつかせながら部屋ぢゆうの匂を

嗅ぎ始めた。品子は二三度、

「リ、ー」

と呼んでみたけれども、彼女の方へはチラリとそつけない流<sup>なが</sup>眊<sup>しめ</sup>を与へたきりで、先<sup>ま</sup>づ出入口と押入の<sup>しきいざわ</sup>閾<sup>しき</sup>際<sup>いざわ</sup>へ行つて匂を嗅いで見、次ぎには窓の所へ行つてガラス障子を一枚づゝ嗅いで見、針箱、座布団、物差、縫ひかけの衣類など、その辺にあるものを一々丹念に嗅いで廻つた。品子はさつき、鶏肉の新聞包を預かつたことを思ひ出して、その包のまゝ通り路へ置いてみたけれども、それには興味を感じないらしく、ちよつと嗅いたゞけで、振り向きもしない。そして、バサリ、バサリ、……と、畳の上に無気味な足音をさせながら、一と通り室内搜索をしてしまふと、もう



一遍出入口の襖の前へ戻つて来て、前脚をかけて開けようとするので、

「リ、ーや、お前けふからわての猫になつたんやで。もう何処へも行つたらあかんねんで。」

と、さう云つてそこに立ち塞がると、又仕方なくバサリ、バサリと歩き廻つて、今度は北側の窓際へ行き、恰好な所に置いてあつた小裂箱こぎればこの上に上つて、背伸びをしながらガラス障子の外を眺めた。

九月も昨日でおしまひになつて、もうほんたうの秋らしく晴れた朝であつたが、少し寒いくらゐるの風が立つて、裏の空地に聳えてゐる五六本のポプラの葉が白くチラ／＼顫ふるへてゐる向うに、摩ま

耶山やさんと六甲の頂が見える。人家がもつと建て込んでゐる蘆屋の二階の景色とは、大分様子が違ふのだけれども、リ、ーはいつたいどんな氣持で見えてゐるのだらうか。品子は図らずも、よく此の猫と二人きりで置き去りにされたことがあつたのを思ひ出した。庄造も、母親も、今津へ出かけたきり歸らないので、一人ぼっちでお茶漬を搔つ込んでゐると、その音を聞いてリ、ーが寄つて来る。あゝ、さうだつた、御飯をやるのを忘れてゐたが、お腹が減つてゐるのだらうと、さすがに可哀さうになつて、残飯の上に出し雑じ魚やこを載せてやると、贅沢な食事に馴れてゐるせゐか嬉しさうな顔もしないで、ほんの申訳ぐらゐしか食べないものだから、つい腹が立つて、折角の愛情も消し飛んでしまふ。夜は夫の寢床を敷い

て、帰るかどうかわからない人を待ち侘びてゐると、その寢床の上へ遠慮会えしやく釈もなく乗つて来て、のう／＼と脚を伸ばす憎らしさに、寝かけたところを叩き起して追ひ立てゝやる。そんな工合に、随分此の猫には当り散らしたものだけでも、再びかうして一緒に暮すやうになつたのは、やつぱり因縁と云ふのであらう。品子は自分が蘆屋の家を追ひ出されて来て、始めて此の二階に落ち着いた時にも、あの北側の窓から山の方を眺めながら、夫恋ひしさの思ひに駆られたことがあるので、今のリ、ーがあゝして外を見てゐる心持もぼんやり分るやうな気がして、ふと眼頭が熱くなつて来るのであつた。

「リ、ーや、さ、此方へ来て、これ食べなさい。――」

やがて彼女は、押入の襖を開けて、かねて用意をしておいたものを取り出しながら云ふのであつた。彼女は昨日塚本の端書はがきを受け取つたので、いよく此処へ連れて来られる珍客を欸待かんたいするために、今朝はいつもより早起きをして、牧場から牛乳を買つて来るやら、皿やお碗を揃へておくやら、——此の珍客にはフンシが必要だと気が付いて、昨夜慌てゝ炮烙ほうらくを買ひに行つたのはいゝが、砂がないのには困つてしまつて、五六丁先の普請場ふしんばから、コンクリートに使う砂を闇にまぎれて盗んで来るやらして、そんなものまで押入の中にこつそり忍ばせて置いたのである。で、その牛乳と、花鯉節はながっおをふりかけた御飯のお皿と、剥げちよろけの、縁ふちのかけたお碗わんを取り出すと、鑊びんの牛乳をお碗へ移して、部屋の

まん中へ新聞紙をひろげた。それからお土産の包を開いて、水煮みずだきにしてある鶏かしわの肉を、筍たけの皮ぐるみそれらの御馳走と一緒に並べた。そして「リ、ーや、リ、ーや」とつゞけさまに呼びながら、皿と鑊とをカチャ／＼打ちつけてみたりしたけれども、リ、ーはてんで聞えないふりをして、まだ窓ガラスにしがみ着いてゐるのであつた。

「リ、ーや」

と、彼女は躍起やつきになつて呼んだ。

「お前、何でそない表おもてばかり見てんの？ お腹すいてエへんのんか？」

さつきの塚本の話では、乗物に酔ふといけなないと云ふ庄造の心づ



かひから、今朝は朝飯を与へてゐないのださうであるから、余程空腹を訴へなければならぬ筈で、本来ならば皿小鉢の鳴る音を聞いたら忽ち飛んで来るところなのに、今はその音も耳に這入らず、ひもじいことも感じないくらゐ、此処を逃れたい一念に駆られてゐるのであらうか。彼女は嘗て此の猫が尼ヶ崎から戻つて来た一件を聞かされてゐるので、当分の間は眼が放されないことであらうと、覺悟してゐたものゝ、でも食べものを食べてくれて、フンシへ小便を垂れるやうになつてくれたら大丈夫だと、それ頼みにしてゐたのだが、来るそうそう々からこんな調子では、直ぐにも逃げられてしまひさうに思へた。そして動物を手なづけるには、自分のやうに性せつ急かちにしてはいけないのだと知りながら、何とか

して食べるところを見届けたさに、無理に窓際から引き離して、部屋のまん中へ抱いて来て、食べものゝ上へ順々に鼻を押しつけてやると、リ、ーは脚をバタ／＼やらして、爪を立てたり引つ掻いたりするので、仕方がなしに放してしまふと、又窓際へ戻つて行つて、こぎればこ小裂箱の上へ登る。

「リ、ーや、これ、これを見て御覧。こゝにお前のいつち好きなもんあるのんに、これが分らんかいな。」

と、此方も依怙えこじ地に追ひかけて行つて、鶏の肉だの牛乳だのを執しつツこ

掘く持ち廻りながら、鼻の先へ擦り着こすけるやうにしてやつても、今日ばかりはその好物の匂にも釣られなかつた。

これが全く見も知らぬ人に預けられたと云ふのではなし、兎も角

も足かけ四年の間同じ屋根の下に住み、同じ竈かまどの御飯をたべて、時にはたつた二人ぎりで三日も四日も留守番をさせられた仲であるのに、あんまり無愛想過ぎるではないか。それとも私にいちめられたことを今も根に持つてゐるのだとすれば、畜生の癖に生意氣など、つい腹も立つて来るのであつたが、こゝで此の猫に逃げられてしまつたら、折角の計けい劃かくが水の泡になつた上、蘆屋の方でそれ見たことかと手を叩いて笑ふであらう、もう此の上は根こんく較くらべをして、氣が折れて来るのを待つより外に仕方がない、な  
あに、あゝして食ひ物とフンシとを眼の前に当てがつておきさへすれば、いくら剛情を張つたつて、しまひにはお腹が減つて来るから食はずにゐられないであらうし、小便だつて垂れるであらう、

そんなことより今日は私は忙しいのだ、是非晩までにと請け合つた仕事があつたのに、朝から何一つ手を付けてゐないのだつたと、やう／＼彼女は思ひ返して、針箱の傍にすわつた。そして男物の銘仙の綿入を、それからセツセと縫ひにかゝつたが、ものゝ一時間もさうしてゐるうちに、直ぐ又心配になつて来るので、とき／＼様子に氣を付けてゐると、やがてり／＼は部屋の隅ツこの方へ行つて、壁にぴつたり寄り添うてうづくまつたまゝ、身動き一つしないやうになつてしまつた。それは全く、畜生ながらも逃れる道のないことを悟つて、観念の眼を閉ぢたとでも云ふのであらうか。人間だつたら、大きな悲しみに鎖とぎされた余り、あらゆる希望を抛なげうつて、死を覚悟したと云ふところでもあらうか。品子は薄

氣味悪くなつて、生きてゐるかどうかを確かめるために、そうつと傍へ寄つて行つて、抱き起して見、呼吸を調べて見、突き動かして見ると、何をされても抵抗もしない代りに、まるで鮑あわびの身のやうに体ぢゆうを引き締めて、固くなつてゐる様が指先に感じられる。まあ、ほんたうに、何と云ふ剛情な猫であらう。こんな工合で、いつになつたら懷なつく時があるであらう。だが事に依よると、わざとあゝ云ふ風をして、此方の油断を見すましてゐるのではないか。今はあゝして、あきらめたやうにしてゐるけれども、重い板戸をさへ開ける猫であるから、うっかり部屋を留守にしたら、その間にゐなくなつてしまふのではないか。さう思ふと彼女は、他人のことよりも自分自身が、御飯を食へに行くことも廁かわやへ立つ

ことも出来ないものであつた。

お午ひるになつて、妹の初子が

「姉さん、御飯」

と、段梯子の下から声をかけると、

「はい」

と品子は立ち上りながら、暫く部屋の中をうろくした。そして結局、メリンスの腰紐を三本つないで、リ、ーの肩から腋の下へ、十文字にたすき襷をかけて、強く緊め過ぎないやうに、さうかと云つてスツポリ抜けられないやうに、何度も念を入れて締め直して、背中でしたかり結び玉を作つた。それからその紐のもう一方の端を持つて、又ひとしきりうろくしてゐたが、とうく天井から下

つてゐる電燈のコードに括り着けると、やつと安心して階下へ降りた。が、食事の間も気にかゝるので、そこくにして上つて来てみると、縛られたまゝ矢張隅ツこの方へ行つて、前よりもなほ体をちぢめてゐるではないか。彼女はいつそ、自分がゐない方がいいのかも知れない、暫くひとりにしておいたら、その間に食べるものは食べ、垂れるものは垂れるかも知れないと、さうも期待してゐたのであつたが、勿論そんな形跡もない。彼女は「チヨツ」と舌打ちをして、今も部屋のまん中に空しく置かれてある御馳走のお皿と、砂が少しも濡れてゐない綺麗なフンシとを恨めしさうに睨みながら、針箱の傍にすわる。かと思ふと、あゝ、さうだつた、あんまり長く縛つておいては可哀さうだと、又立ち上つて、

解き<sup>ほど</sup>に行つて、ついでに撫でゝみたり、抱いてみたり、駄目と知りながらも食べものをすゝめてみたり、フンシの位置を換へてみたり、それを幾度か繰り返すうちに日が暮れて来て、夕方の六時頃になると、階<sup>した</sup>下から初子が晩の御飯を知らせるので、又紐を持つて立ち上る。そんな風にして、その日は一日猫のことにかまけて、請け合つた仕事も出来ないまゝに秋の夜長が更けてしまつた。十一時が鳴ると、品子は部屋を片づけてから、もう一度リ、ーを縛つて、座布団を二枚も敷いた上へ臥かして、御飯と便器とを身近な所へ並べてやつた。それから自分の寢床を伸べ、あかりを消して眠りに就いたが、せめて朝になるまでには、牛乳でも鶏<sup>かしわ</sup>でも何でもいゝから、孰<sup>ど</sup>れか一つぐらゐる食べてゐてくれないだらうか、



明日の朝眼を開いた時あのお皿が空になつてゐてくれたら、さうしてフンシが濡れてゐてくれたら、どんなに嬉しいであらうなど、思ふと、眼が冴えて来て寝られないまゝに、リ、ーの寢息が聞えるか知らんと闇の中で耳を澄ますと、しーんと水を打ったやうで、微かな音もしてゐない。あまり静か過ぎるのが氣になつて、枕から首を擡<sup>もた</sup>げると、窓の方は薄ぼんやりと明るいけれども、リ、ーがある筈の隅ツこの方は生<sup>あいにく</sup>憎真つ暗で何も見えない。ふと思ひついて、頭の上を手さぐりして、天井から斜<sup>はす</sup>ツかひに引つ張られてゐる紐を掴んで、手繰<sup>たぐ</sup>り寄せると、大丈夫手答へがある。でも念のために電燈を付けて見ると、成る程あることはあるけれども、あの、拗<sup>す</sup>ねたやうにちゞこまつて、円くなつてゐる姿勢が、昼間

と少しも變つてゐないし、食べ物もフンシもそつくりそのまゝ並んでゐるので、又がっかりして明りを消す。そのうちに漸く<sup>ようや</sup>とろ／＼としかけて、暫くしてから眼を覚ますと、もういつの間にか夜が明けてゐて、見ればフンシの砂の上に大きな塊が落してあり、牛乳のお皿と御飯のお皿がすつかり平げられてゐるので、しめたと思ふとそれが夢だつたりするのである。

だが、一匹の猫を手なづけるのは、こんなに骨の折れることなのだらうか。それともリ、ーと云ふ猫が特別に剛情<sup>なつ</sup>なのだらうか。尤も<sup>もつと</sup>これがまだ頑<sup>がんぜ</sup> isn't 仔猫であつたら、訳なく懐くのであらうけれども、かう云ふ老猫になつて来ると、人間と同じで、習慣や環境の違つた場所へ連れて来られると云ふことが、非常な打撃な

のかも知れない。そして遂には、それが原因で死ぬやうなことになるのかも知れない。品子はもとく、腹に一つの目算があつて好きでもない猫を引き取つたので、こんなに手数料が懸るものとは知らなかつたが、云はゞ以前は敵同士であつた獣のお蔭で、夜もおちく寝られないほど苦勞をさせられる因縁を思ひ合はせると、不思議にも腹が立たないで、猫も可哀さうなら自分も可哀さうだと云ふ氣持が湧いて来るのであつた。考へてみれば、自分だつて蘆屋の家を出て来た当座は、此処の二階にひとりでしよんぼりしてゐることが此の上もなく悲しくつて、妹夫婦が見てゐない時は、毎日毎晩泣いてばかりゐたではないか。自分だつて、二日三日は何をする元氣もなく、ろくく物も食へなかつたではないか。さ

うしてみれば、リ、ーにしたつて蘆屋が恋ひしいのは当り前だ。庄造さんにあんなに可愛がられてゐたのだものを、そのくらゐな情がなければ恩知らずだ。ましてこんなに年を取つて、住み馴れた家を追はれ、嫌ひな人の所へなんか連れて来られて、どんなに遣<sup>や</sup>る瀬<sup>せ</sup>ないであらう。もしほんたうにリ、ーを手なづけようと云ふなら、その心持を察してやり、何よりも安心と信頼を持たせるやうに仕向けなければならぬ。悲しい感情で胸が一杯になつてゐる時に、無理に御馳走をすゝめたら、誰だつて腹が立つてはいか。だのに自分は、「食べるのが嫌なら小便をしろ」と、フンシ迄も突き付けた。あまりと云へば手前勝手な、心なしの遣り方だつた。いや、そのくらゐはまだいゝとして、縛つたのが一番よ

くなかつた。相手に信頼されたかつたら、先づ此方から信頼してかゝらなければならないのに、あれではますます恐怖心を起させる。いくら猫でも、縛られてゐては食欲も出ないであらうし、小便も詰まつてしまふであらう。

明くる日になると、品子は縛ることを止めにして、逃げられたら逃げられたで仕方がないと、度胸どきようをきめた。そしてとき／＼、五分か十分ぐらゐの間、試しに独り放つておいて、部屋を留守にしてみると、まだ剛情にちゞこまつてはゐるけれども、いゝ塩あんば梅いに逃げ出しさうな風も見えない。それで俄にわかに氣を許したことが悪かつたのだが、お午ひるの御飯に、今日はゆつくり食べようと思つて、三十分ほど階下したへ降りてゐる時だつた、二階で何か、ガ

サツと云ふ音がしたやうなので、急いで上つて来てみると、襖が五寸ほど開いてゐる。多分リ、ーは、そこから廊下へ出て、南側の、六畳の間を通り抜けて、折悪く開け放しになつてゐたその窓から屋根へ飛び出したのであらう、もうその辺には影も形も見えなかつた。

「リ、ーや、………」

彼女はさすがに大きな声で喚<sup>わめ</sup>かうとして、ついその声が出ずにしまつた。あんなに辛苦したかひもなく、やつぱり逃げられたかと思ふと、もう追ひかける氣力もなく、何だかホツとして、荷が下りたやうな工合であつた。どうせ自分は動物を馴らすのが下手なのだから、晩<sup>おそ</sup>かれ早かれ逃げられるにきまつてゐるものなら、早

く片がついた方がいゝかも知れない。これで却つてサバ／＼して、今日からは仕事も<sup>はかど</sup>捗るであらうし、夜ものんびり寝られるであらう。それでも彼女は、裏の空地へ出て行つて、雑草の中を彼方此方掻き分けながら、

「リ、ーや、リ、ーや」

と、暫く呼んでみたけれども、今頃こんな所に愚図々々してゐる筈がないことは、分りきつてゐたのであつた。

リ、ーが逃げて行つてから、当日の晩も、その明くる晩も、又その明くる晩も、品子は安心して寝られるどころか、さつぱり眠れないやうになつてしまつた。いつたい彼女は<sup>かんしょう</sup>癪性のせゐか、

二十六と云ふ歳としのわりには眼めぎとい方で、下女奉公をしてゐた時代から、どうかすると寝られない癖があつたものだが、今度も此の二階に引き移つてから、多分寢所の変つたのが原因であらう、殆ど正味三四時間しか寝ない晩が長い間つゞいてゐて、やうくほとん十日ばかり前から少し寝られるやうになりかけた所だつたのである。それがあの晩から、又眠れなくなつたのはどうしてか知らん？ 彼女は詰めて仕事をする、直きに肩が凝つて来たり興奮したりするのであるが、此の間からリ、ーのためにおくれてゐたのを取り返さうとして、余り縫ひ物に熱中し過ぎたせゐか知らん？ それに元来が冷え性なので、まだ十月の初めだと云ふのにそろ／＼足が冷えて来て、布団へ這入つても容易に温ぬくまらないのである



る。彼女は夫に疎<sup>うと</sup>んぜられたそのそもゝのキツカケを、ふと想ひ出して来るのであるが、それも今から考へれば、全く自分の冷え性から起つたことなのであつた。ひどく寝つきのいゝ庄造は、布団へ這入つて五分もすれば眠つてしまふのに、そこへ突然氷のやうな足に触られて、起されてしまふのが溜<sup>たま</sup>らないから、お前はそつちで寝てくれると云ふ。そんなことからつい別々に寝るやうになつたが、寒い時分には湯たんぽのことでよく喧嘩をした。なぜかと云つて、庄造は彼女と反対に、人一倍上<sup>の</sup>気<sup>ぽ</sup>せ性なのである。分けても足が熱いと云つて、冬でも少し布団の裾へ爪先を出すくらゐにしないと、寝られない男なのである。だから湯たんぽで暖めである布団へ這入ることを嫌つて、五分と辛抱してゐなかつた。

勿論それが不和を醸かもした根本の理由ではないけれども、しかしさう云ふ体質の相違がよい口実に使はれて、だん／＼独り寝の習慣を付けられてしまったのであつた。

彼女は右の首筋から肩の方へしこりが出来て恐しく張つてゐるやうなので、とき／＼そこを揉んでみたり、寝返りを打つて枕の当るところを換へてみたりした。毎年夏から秋にかけて、陽氣の変り目に右の下頤の虫歯が痛んで困るのであるが、昨夜あたりから少しズキ／＼し出したやうである。さう云へば、此の六甲おろしと云ふ所は、これから冬になつて来ると、毎年六甲風が吹いて、蘆屋などよりずっと寒さが厳しいのであると聞いてゐたけれども、もう此の頃でも夜は相当に冷え込むので、同じ阪神の間でありなが

ら、何だか遠い山国へでも来たやうな気がする。彼女は体を海老のやうにちゞこめて、無感覚になりかけた両方の足を擦り合はした。蘆屋時代には、もう十月の末になると、夫と喧嘩しながらも湯たんぽを入れて寝たのであったが、こんな工合だと、ことしはそれまで待てないかも知れない。……

寝付かれないものとあきらめてしまつて、電燈を付けて、妹から借りた先月号の「主婦之友」を、横向きに臥ながら読み出したのが、ちやうど夜中の一時であつたが、それから間もなく、遠くの方からざあツと云ふ音が近寄つて来て、直きにざあツと通り過ぎて行くのが聞えた。おや、時雨しぐれかな、と思つてゐると、又ざあツとやつて来て、屋根の上を通る時分には、パラ／＼と疎まばらな音を

落して、忍び足に消えて行く。暫くすると、又ぎあツとやつて来る。それにつけても、リ、ーは今頃何処にゐるか、蘆屋へ歸つてゐるならいゝが、もしさうでもなく、路に迷つてゐるなら、こんな晩には嘸雨さぞに濡れてゐるであらう。実を云ふと、まだ塚本には逃げられたことを知らせてやらないのであるが、あれから此方、ずつとそのことが頭に引つかゝつてゐるのであつた。彼女としては早く知らしてやつた方が行き届いてゐることは分つてゐたのだが、「憚りはばながら、とうに戻つて来てをりますから御安心下すつて結構です、いろ／＼お手数をかけましたが、もう御入用はありますまいな」と、皮肉交りに云はれさうなのが業腹ごうはらで、つい延び／＼にしてゐたのである。しかし戻つてゐるとしたら、此方の

通知を待つ迄もなく、向うからも挨拶がありさうなものなのに、何とも云つて来ないのをみると、何処かにまごついてゐるのであらうか。尼ヶ崎の時は、姿が見えなくなつてから一週間目に戻つたと云ふのだが、今度はそんなに遠い所ではないのだし、つい三日前に通つて来たばかりの路なのだから、よもや迷ふことはないであらう。たゞ近頃はもうろく耄碌してゐて、あの時分よりはカンも悪く、動作も鈍くなつてゐるから、三日かゝるところが四日かゝるやうなことはあるかも知れない。さうだとしても、おそくも明日か明後日のうちには無事に戻つて行くであらう。するとあの二人がどんな喜びやうをするか。そしてどんなに溜飲を下げるか。きつと塚本さんまでが一緒になつて、「それ見ろ、あれは亭主に捨

てられるばかりか、猫にまで捨てられるやうな女だ」と云ふであらう。いや／＼、階下の妹夫婦もお腹の中ではさう思ふであらうし、世間の人みんな笑ひ物にするであらう。

その時、しぐれがまた屋根の上をパラ／＼と通つて行つた後から、窓のガラス障子に、何かがぱたんと打<sup>ぶ</sup>つかるやうな音がした。風が出たな、あゝ、イヤなことだ、と、さう思つてゐるうちに、風にしては少し重みのあるやうなものが、つゞいて二度ばかり、ぱたん、ぱたんと、ガラスを叩いたやうであつたが、かすかに、

「ニヤア」

と云ふ声が、何処かに聞えた。まさか今時分、そんなことが、……と、ぎくツとしながら、気のせゐかも知れぬと耳を澄ますと、

矢張、

「ニヤア」

と啼いてゐるのである。そしてそのあとから、あのばたんと云ふ音が聞えて来るのである。彼女は慌てゝ跳ね起きて、窓のカーテンを開けてみた。と、今度はハツキリ、

「ニヤア」

と云ふのがガラス戸の向うで聞えて、ばたん、……と云ふ音と同時に、黒い物の影がさつと掠<sup>かす</sup>めた。さうか、やつぱりさうだつたのか、——彼女はさすがに、その声には覚えがあつた。此の間こゝの二階にゐた時は、とう／＼一度も啼かなかつたが、それは確かに、蘆屋時代に聞き馴れた声に違ひなかつた。

急いで挿し込みのネズを抜いて、窓から半身を乗り出しながら、室内から射す電燈のあかりをたよりに暗い屋根の上を透かしたけれども、一瞬間、何も見えなかつた。想像するに、その窓の外に手すりの附いた張り出しがあるので、リ、ーは多分そこへ上つて、啼きながら窓を叩いてゐたのに違ひなく、あのばたと云ふ音とたつた今見えた黒い影とは正しくそれだつたと思へるのであるが、内側からガラス戸を開けた途端に、何処かへ逃げて行つたのであらうか。

「リ、ーや、……………」

と、階下<sup>した</sup>の夫婦を起さないやうに気がねしながら、彼女は闇に声を投げた。瓦が濡れて光つてゐるので、さつきのあれが時雨だつ





たことは疑ふ余地がないけれども、それがまるで嘘だつたやうに、空には星がきら／＼してゐる。眼の前を蔽ふ摩耶山の、幅広な、真つ黒な肩にも、ケーブルカアのあかりは消えてしまつてゐるが、頂上のホテルに灯の燈つてゐるのが見える。彼女は張り出しへ片膝をかけて、屋根の上へノメリ出しながら、もう一度、

「リ、ーや」

と、呼んだ。すると、

「ニヤア」

と云ふ返辞をして、瓦の上を此方へ歩いて来るらしく、  
光る二つの眼の玉がだん／＼近寄つて来るのである。  
燐色に

「リ、ーや」

「ニヤア」

「リ、ーや」

「ニヤア」

何度もく、彼女が頻繁に呼び続けると、その度毎たびごとにリ、ーは返辞をするのであつたが、こんなことは、つひぞ今迄にないことだつた。自分を可愛がつてくれる人と、内心嫌つてゐる人とをよく知つてゐて、庄造が呼べば答へるけれども、品子が呼ぶと知らん顔をしてゐたものだけに、今夜は幾度でも億おっくう劫がらずに答へるばかりでなく、次第に媚びを含んだやうな、何とも云へない優しい声を出すのである。そして、あの青く光る瞳を挙げて、体に波を打たせながら手すりの下まで寄つて来ては、又すうつと向う

へ行くのである。大方猫にしてみれば、自分が無愛想にしてゐた人に、今日から可愛がつて貰はうと思つて、いくらか今迄の無礼を詫<sup>わ</sup>びる心持も籠めて、あんな声を出してゐるのであらう。すつかり態度を改めて、庇護を仰ぐ氣になつたことを、何とかして分つて貰はうと、一生懸命なのであらう。品子は初めて此の獸からそんな優しい返辞をされたのが、子供のやうに嬉しくつて、何度でも呼んでみるのであつたが、抱かうとしてもなか／＼掴まへられないので、暫くの間、わざと窓際を離れてみると、やがてリ、ーは身を躍らして、ヒラリと部屋へ飛び込んで来た。それから、全く思ひがけないことには、寢床の上にすわつてゐる品子の方へ一直線に歩いて来て、その膝に前脚をかけた。

これはまあ一体どうしたことか、——彼女が呆れてゐるうちに、  
リ、ーはあの、哀愁に充ちた眼差でじつと彼女を見上げながら、  
もう胸のあたりへ<sup>もた</sup>靠れかゝつて来て、綿フランネルの寝間着の襟  
へ、額をぐいぐいと押し付けるので、此方からも頬ずりをしてや  
ると、頤だの、耳だの、口の周りだの、鼻の頭だのを、やたらに  
舐め廻すのであつた。さう云へば、猫は二人きりになると接吻を  
したり、顔をすり寄せたり、全く人間と同じやうな仕方で愛情を  
示すものだと聞いてゐたのは、これだつたのか、いつも人の見て  
ゐない所で夫がこつそりり、ーを相手に楽しんでゐたのは、これ  
をされてゐたのだつたか。——彼女は猫に特有な日向臭<sup>ひなたくさ</sup>い毛  
皮の匂がされ、ザラ／＼と皮膚に引つかゝるやうな、痛<sup>いたがゆ</sup>痒

い舌ざはりを顔ぢゆうに感じた。そして、突然、たまらなく可愛くなつて来て、

「リ、ーや」

と云ひながら、夢中でぎゅツと抱きすくめると、何か、毛皮のところ／＼に、冷めたく光るものがあるので、扱さては今の雨に濡れたんだと、初めて合点が行つたのであつた。

それにしても、蘆屋の方へ帰らないで、此方へ帰つたのはなぜであらう。恐らく最初は蘆屋をめざして逃げ出したのが、途中で路が分らなくなつて、戻つて来たのではないであらうか。僅わずか三里か四里のところを、三日もかゝつてうろ／＼しながら、とう／＼目的地へ行き着けないで引つ返して来るとは、リ、ーにしては余

り意氣地がないやうだけれども、事に依ると此の可哀さうな獣は、もうそれほどに老衰してゐるのであらう。氣だけは昔に変わらないつもりで、逃げてみたことはみたものゝ、視力だの、記憶力だの、嗅覚だのと云ふものが、もはや昔の半分もの働きもしてくれないので、どつちの路を、どつちの方角から、どう云ふ風に連れて来られたのか見当が付かず、彼方へ行つては踏み迷ひ、此方へ行つては踏み迷ひして、又もとの場所へ戻つて来る。昔だつたら、一旦かうと思ひ込んだらどんなに路のない所でもガムシヤラに突進したものが、今では自信がなくなつて、様子の知れない所へ分け入ると怖氣おしけがついて、ひとりでに足がすくんでしまふ。きつとり、ーは、そんな風にして案外遠くの方まで行くことが出来ず、

此の界限かいわいをまご／＼してゐたのであらう。さうだとすれば、昨日の晩も、一昨日の晩も、夜な／＼此の二階の窓の近くへ忍び寄つて、入れて貰はうかどうかと躊躇ためらひながら、中の様子を窺うかがつてゐたのかも知れない。そして今夜も、あの屋根の上の暗い所にうづくまつて長い間考へてゐたのであらうが、室内にあまりが燈つたのと、俄かに雨が降つて來たのとで、急にあゝ云ふ啼き声を出して障子を叩く氣になつたのであらう。でもほんたうに、よく歸つて來てくれたものだ。よつぽど辛い目に遭つたればこそであらうけれども、矢張私をアカの他人とは思つてゐない証拠なのだ。それに私も、今夜に限つてこんな時刻に電燈をつけて、雑誌を読んでゐたと云ふのは、虫が知らしたせゐなのだ。いや、考



へれば、此の三日間ちよつとも眠れなかつたのも、実はリ、ーの  
歸つて来るのが何となく待たれたからだつたのだ。さう思ふと彼  
女は、涙が出て来て仕方がないので、

「なあ、リ、ーや、もう何処へも行けへんなあ。」

と、さう云ひながら、もう一遍ぎゅつと抱きしめると、珍しいこ  
とにリ、ーはじつと大人しくして、いつまでも抱かれてゐるので  
あつたが、その、物も云はずに唯悲しさうな眼つきをしてゐる年  
老いた猫の胸の中が、今の彼女には不思議なくらゐはつきり見透  
せるのであつた。

「お前、きつとお腹減なかつてゐるやろけど、今夜はもう遅いよつてに  
な。——台所搜したら何なとあるやろ思ふけど、ま、仕方がない、

此処わての家と違ふよつてに、明日の朝まで待ちなされや。」

彼女はひとことゝに頬ずりをしてから、漸ようようりゝゝを下に置いて、

忘れてゐた窓の戸締まりをし、座布団で寢床を拵へてやり、あの時以来まだ押入に突つ込んであつたフンシを出してやりなどすると、りゝゝはその間も始終後を追つて歩いて、足もとに絡み着くやうにした。そして少しでも立ち止まると、直ぐその傍へ走り寄つて、首を一方へ傾けながら、何度も耳の付け根のあたりを擦り着けに来るので、

「えゝ、もうえゝがな、分つてゐるがな。さ、此処へ来て寝なさいゝ。」

と、座布団の上へ抱いて来てやつて、大急ぎであかりを消して、

やつと彼女は自分の寢床へ這入つたのであつたが、それから一分とたゝないうちに、たちま忽ちすうつと枕の近くにあのひなたくさ日向臭い匂がして来て、掛け布団をもくく持ち上げながら、びろうど天鷲絨のやうな柔かい毛の物体が這入つて来た。と、ぐいぐい頭からもぐり込んで、脚の方へ降りて行つて、裾のあたりを暫くの間うろくしてから、又上の方へ上つて来て、寢間着のふところへ首を入れたなり動かないやうになつてしまつたが、やがてさも氣持の好きうな、非常に大きな音を立てゝ咽喉をゴロ／＼鳴らし始めた。

さう云へば以前、庄造の寢床の中でこんな工合にゴロ／＼云ふのを、いつも隣で聞かされながら云ひ知れぬ嫉妬を覚えたものだが、今夜は特別にそのゴロ／＼が大きな声に聞えるのは、よつぽど上

機嫌なのであらうか、それとも自分の寢床の中だと、かう云ふ風にひゞくのであらうか。彼女はリ、ーの冷めたく濡れた鼻のあたまと、へんにぷよくした蹠あしのうらの肉とを胸の上に感じると、全く初めの出来事なので、奇妙のやうな、嬉しいやうな心地がして、真つ暗な中で手さぐりしながら頸のあたりを撫でゝやつた。するとり、ーは一層大きくゴロ／＼云ひ出して、とき／＼、突然人差指の先へ、きゅツと噛み着いて齒型を附けるのであつたが、まだそんなことをされた経験のない彼女にも、それが異常な興奮と喜びの余りのしぐさであることが分るのであつた。

その明くる日から、リ、ーはすっかり品子と仲好しになつてしまつて、心から信頼してゐる様子が見え、もう牛乳でも、花鯉節の

御飯でも、何でもおいしそうに食べた。そしてフンシの砂の中へ日に幾度か排泄物を落すので、いつもその匂が四畳半の部屋の中へむうツと籠るやうになつたが、彼女はそれを嗅いでみると、いろ／＼な記憶が思ひがけなくよみがへつて、蘆屋時代のなつかしい日が戻つて来たやうに感ずるのであつた。なぜかと云つて、蘆屋の家では明けても暮れても此の匂がしてゐたではないか。あの家の中の襖にも、柱にも、壁にも、天井にも、皆此の匂が滲<sup>し</sup>みてゐて、彼女は夫や姑と一緒に四年の間これを嗅ぎながら、口惜しいことや悲しいことの数々に堪へて来たのではないか。だが、あの時分には、此の鼻持ちのならない匂を呪つてばかりゐたくせに、今はその同じ匂が何と甘い回想をそゝることよ。あの時分に

は此の匂故にひとしほ憎らしかつた猫が、今はその反対に、此の匂故に如何にいとほしいことよ。彼女はそれゝち毎晩のやうにりゝゝを抱いて眠りながら、此の柔順で可愛らしい獣を、どうして昔はあんなにも嫌つたのかと思ふと、あの頃の自分と云ふものが、ひどく意地の悪い、鬼のやうな女にさへ見えて来るのであつた。

さて此の場合、品子が此の猫の身柄について福子に嫌味な手紙を出したり、塚本を通してあんなに執拗しつこく頼んだりした動機と云ふものを、一寸説明しておかなければならないのであるが、正直のところ、そこにはいたづらや意地悪の興味が手伝つてゐたことも確かであり、又庄造が猫に釣られて訪ねて来るかも知れないと

云ふ万一の望みもあつたであらうが、そんな眼の前のことよりも、  
実はもつと遠い／＼先のこと、——ま、早くて半年、おそくて  
一年か二年もすれば、多分福子と庄造の仲が無事に行く筈はない  
のだからと、その時を見越してゐるのであつた。それと云ふのが、  
もと／＼塚本の仲人口なこうどぐちに乘せられて嫁に行つたのが不覺だつた  
ので、今更あんな怠け者の、意気地なしの、働きのない男なんぞ  
に、捨てられた方が仕合はせだつたかも知れないのだが、でも彼  
女としてどう考へても忌ま／＼しく、あきらめきれない気がする  
のは、当人同士が飽きも飽かれもした訳ではないのに、ハタの人  
間が小細工をして追ひ出したのだと、さう云ふ一念があるからだ  
つた。もつと尤もそんなことを云ふと、いや、さう思ふのはお前さんの

己惚<sup>うぬぼ</sup>れだ、それは成る程、姑との折合も悪かつたに違ひないけれども、夫婦仲だつてちつとも良いことはなかつたではないか、お前さんは御亭主をのろまだと云つて低能児扱ひにするし、御亭主はお前さんを我が強いと云つて鬱陶<sup>うつとう</sup>しがるし、いつも喧嘩ばかりしてゐたのを見ると、よく／＼性<sup>しやう</sup>が合はないのだ、もし御亭主がほんとお前さんを好いてゐるなら、いくらハタから押し付け たつて、外に女を拵へる訳がありますまいと、さう露骨には云はない迄も、塚本などのお腹の中は大<sup>たい</sup>概<sup>がい</sup>さうにきまつてゐるのだが、それは庄造と云ふ人の性質を知らないからのことなので、彼女に云はせれば、いつたいあの人はハタから強く押し付けられたら、否<sup>いや</sup>も応<sup>おう</sup>もないのである。呑氣と云ふのか、ぐうたらと云ふの



か、其の人よりも此の人がいゝと云はれると、すぐふら／＼とその氣になつてしまふのだけれども、自分から女を拵へて古い女房を追ひ出したりする程、一途に思ひ詰める性分ではないのである。だから品子は熱烈に惚れられた覚えはないが、嫌はれたと云ふ氣もしないので、周<sup>まわ</sup>りの者が智慧をつけたりそゝのかしたりしなかつたら、よもや不縁にはならなかつたらう、自分がこんな憂き目を見るのは、全くおりんだの、福子だの、福子の親父<sup>おやじ</sup>だのと云ふものがお膳立てをしたからなのだと、さう思はれて、少し誇張した云ひ方をすれば、生木<sup>なまき</sup>を割<sup>さ</sup>かれたやうな感じが胸の奥の方にくすぶつてゐるので、未練がましいやうだけれども、どうも此のまゝでは堪忍出来ないものであつた。

しかし、それなら、うすくおりんなどのしてゐることを感付かないでもなかつた時分に、何とか手段の施しほどこやうがあつたゞらうに、——いよく蘆屋を追ひ出される間際にだつて、もつと頑張つてみたらよかつたらうに、——じたいさう云ふ策略にかけては姑のおりんと好い取組だと云はれた彼女が、案外あつさり旗を巻いて、おとなしく追ん出てしまつたのはなぜであらうか、日頃の負けず嫌ひにも似合はないと云ふことになるが、そこにはやつぱり彼女らしい思はくがないでもなかつた。ありていに云ふと、今度の事は彼女の方に最初幾分の油断があつたから斯こうなつたので、それと云ふのも、あの多情者の、不良少女上りの福子を、何ぼ何でも忤の嫁にしようと迄はおりんも考へてゐないであらうし、

又尻の軽い福子が、まさか辛抱する気もあるまいと、たかをくくつてゐたからなのだが、そこに多少の目算違ひがあつたとしても、どうせ長続きのする二人でないと云ふ見透しに、今も変りはないのであつた。<sup>もつと</sup>尤も福子は年も若いし、男好きのする顔だちだし、鼻にかける程の学問はないが女学校へも一二年行つてゐたのだし、それに何より持参金が附いてゐるのだから、庄造としては据<sup>す</sup>ゑ膳<sup>ぜん</sup>の箸<sup>はし</sup>を取らぬ箸はなく、先づ<sup>ま</sup>当分は有卦<sup>うけ</sup>に入つた氣でゐるだらうけれども、福子の方がやがて庄造では喰ひ足らなくなつて、浮氣をせずにはゐないであらう。何しろあの女は男一人を守れないたちで、もうその方では札<sup>ふだつ</sup>附きになつてゐるのだから、どうせ今度も始まることは分りきつてゐるのだが、それが眼に余るやうにな

れば、いくら人の好い庄造だつて黙つてゐられないであらうし、おりんにしても匙さじを投げるにきまつてゐる。ぜんたい庄造は兎に角として、シツカリ者と云はれるおりんにそのくらゐなことが見えなない筈はないのだけれども、今度は慾が手伝つたので、つい無理な細工をしたのかも知れない。だから品子は、こゝでなまじな悪あがきをするよりは、一と先づ敵に勝たしておいて、徐ろおもむに後こ図うとを策しても晩おそくはないと云ふ腹なので、中々あきらめてはゐないのだつたが、でもそんなことは、無論塚本に対しても噫おくびにも出しはしなかつた。うはべは同情が寄るやうに、なるべく哀れつぽいところを見せて、心の中では、どうしても、う一遍あそこだけ彼処の家へ戻つてやる、今に見てゐろと思ひもし、又その思ひがいつか

は遂げられるだらうと云ふ望みに生きてもゐるのだつた。

それに、品子は、庄造のことをたよりない人とは思ふけれども、どう云ふものか憎むことが出来なかつた。あんな工合に、何の分別もなくふらくしてゐて、周りの人達が右と云へば右を向き、左と云へば左を向くと云ふ風だから、今度にしてもあの連中のいゝやうにされてゐるのであらうが、それを考へると、子供を一人歩きさせてゐるやうな、こころもと心許ない、可哀さうな感じがするのである。そしてとく、さう云ふ点にへんな可愛気のある人なので、一人前の男と思へば腹が立つこともあつたけれども、幾らか自分より下に見下して扱ふと、妙にあたりの柔かい、優しい肌合があるものだから、だんくそれに絆ほどされて抜きさしがならない

やうになり、持つて来た物までみんな注ぎ込んで、裸にされて放り出されてしまったのだが、彼女としてはそんなにまでして尽してやつたと云ふところに、なおさら尚更未練が残るのである。全く、此の一二年間のあの家の暮らしは、半分以上は彼女の痩せ腕で支へてゐたやうなものではないか。好いあんばいにお針が達者だつたから、近所の仕事を貰つて来ては夜の眼も寝ずに縫ひ物をして、どうやら<sup>しの</sup>凌ぎをつけてゐたので、彼女の働きがなかつたら、母親なぞがいくら威張つてもどうにもなりはしなかつたではないか。おりんは土地での嫌はれ者、庄造はあの通りでさつぱり信用がなかつたから、諸払ひの滞り<sup>とどこお</sup>などもやかましく催促されたものだが、彼女への同情があつたればこそ節季<sup>せつき</sup>が越せて行つたのではないか。

それだのにあの恩知らずの親子が、慾に眼がくれてあゝ云ふ者を引ずり込んで、牛を馬に乗り換へた氣であるけれども、まあ見てゐるがいゝ、あの女にあの家の切り盛りが出来るかどうか、持参金附きは結構だけれど、なまじそんなものがあつたら、一層嫁のきぎ氣随氣儘が募るであらうし、庄造もそれをアテにして怠けるであらうし、結局親子三人の思はくが皆それ／＼に外れて来るところから、争ひの種が尽きないであらう。その時分になつて、前の女房の有難みが始めてほんたうに分るのだ。品子はこんなふしだらではなかつた、かう云ふ時にあゝもしてくれた、かうもしてくれたと、庄造ばかりでなく、母親までがきつと自分の失策を認めて、後悔するのだ。あの女は又あの女で、さん／＼あの家を搔

き廻した揚句の果てに、飛び出してしまふのが落ちなのだ。さうなることは今から明々白々で、太鼓判を捺おしてやりたいくらいであるのに、それが分らないとは憐れな人達もあればあるものよと、内心せゝら笑ひながら時機を待つ積りでゐるのだが、しかし用心深い彼女は、待つにつけてはリ、ーを預かつておくと云ふ一策を考へついたのであつた。

彼女はいつも、上の学校を一二年でも覗いたことがあると云ふ福子に対して、教育の点では退ひけ目を感じてゐたのであるが、でもほんたうの智慧くらべなら、福子にだつておりんにだつて負けるものかと云ふ自負心があるので、リ、ーを預かると云ふ手段を思ひついた時は、我ながらの妙案にひとりで感心してしまつた。な



ぜかといつて、リ、ーさへ此方へ引き取つて置いたら、恐らく庄造は雨につけ、風につけ、リ、ーのことを思ひ出す度に彼女のことを思ひ出し、リ、ーを不憫と思ふ心が、知らず識らず彼女を憐れむ心にもならうからである。そして、さうすれば、いつ迄たつても精神的に縁が切れない理窟であるし、そこへ持つて来て福子との仲がシツクリ行かないやうになると、いよくリ、ーが恋ひしいと共に前の女房が恋ひしくならう。彼女が未だに再縁もせず、猫を相手に佗<sup>わ</sup>びしく暮らしてゐると聞いては、一般の同情が集まるのは無論のこと、庄造だつて悪い気持はする筈がなく、ます／＼福子に嫌気がさすやうになるであらうから、手を下さずして彼等の仲を割くことに成功し、復縁の時期を早めることが出来る。

——ま、さうお誂あつらへ向きに行つてくれたら仕合せであるが、彼

女自身はさうなる見込みを立てゝゐた。たゞ問題はリ、ーを素直に引き渡すかどうかと云ふことであつたが、それとても、福子の嫉妬心を煽り立てたら大丈夫うまく行くつもりでゐた。だからあの手紙の文句なんでも、さう云ふ深謀遠慮を以て書かれてゐたので、単純ないたづらや嫌がらせではなかつたのであるが、お気の毒ながら頭の悪い連中には、どうして私が好きでもない猫を欲しがるのか、とてもその真意が掴めツこあるまい、そしていろいろ滑稽こっけい極まる邪推をしたり、子供じみた騒ぎ方をするであらうと云ふところに、抑へきれない優越感を覚えたのであつた。

兎に角、そんな訳であるから、その折角のり、ーに逃げられた時

の落胆と、思ひがけなくそれが戻つて来た時の喜びとがどんなに大きかつたとしても、ひつきよう畢 竟それは得意の「深謀遠慮」に基づく打算的な感情であつて、ほんたうの愛着ではない筈なのだが、あの時以来、一緒に二階で暮らすやうになつてみると、全く予想もしなかつた結果が現はれて来たのである。彼女は夜なく、その一匹の日向臭い獣を抱へて同じ寢床の中に臥ながら、どうして猫と云ふものはこんなにも可愛らしいのであらう、それなのに又、昔はどうして此の可愛さが理解出来なかつたのであらうと、今では悔恨と自責の念に駆られるのであつた。おおかた大方蘆屋時代には、最初に変な反感を抱いてしまつたので、此の猫の美点が眼に這入らなかつたのであらうが、それと云ふのも、焼餅があつたからな

のである。焼餅のために、本来可愛らしいしぐさが唯ただもう憎らしく見えたのである。たとへば彼女は、寒い時分に夫の寢床へもぐり込んで行く此の猫を憎み、同時に夫を恨んだものだが、今になつてみれば何の憎むことも恨むこともありはしない。現に彼女も、もう此の頃では独り寝の寒さがしみ／＼こたへてゐるではないか。まして猫と云ふ獣は人間よりも体温が高いので、ひとしほ寒がりなのである。猫に暑い日は土用の三日間だけしかないと云はれるのである。さうだとすれば、今は秋の半ばであるから、老年のりゝが暖かい寢床へ慕ひ寄るのは当然ではないか。いや、それよりも、彼女自身が、かうして猫と寝てゐると、此の暖かいことはどうだ！ 例年ならば、今夜あたりは湯たんぽなしでは寝ら

れないであらうのに、今年はまだそんなものも使はないで、寒い  
思ひもせずにあるのは、リ、ーが這入つて来てくれるお蔭ではな  
いか。彼女自身が、夜毎々々にリ、ーを放せなくなつてゐるでは  
ないか。その外昔は、此の猫の我が儘を憎み、相手に依つて態度  
を変へるのを憎み、蔭日向のあるのを憎んだけれども、それもこ  
れも、みんな此方の愛情が足らなかつたからなのだ。猫には猫の  
智慧があつて、ちゃんと人間の心持が分る。その証拠には、此方  
が今迄のやうでなく、ほんたうの愛情を持つやうになつたら、直  
ぐ戻つて来て此の通り馴れ／＼しくするではないか。彼女が自分  
の気持の変化を意識するより、リ、ーの方がより早く嗅ぎつけた  
くらゐではないか。

品子は今迄、猫は愚か人間に対しても、こんなにこまやかな情愛を感じたこともなく、示したこともないやうな気がした。それは一つには、おりんを始めいろ／＼な人から情の強い女だじようこわと云はれてゐたものだから、いつか自分でもさう思はされてゐたせゐであつたが、此の間からり／＼のために捧げ尽した辛勞と心づかひとを考へる時、自分の何処にこんな暖かい、優しい情緒が潜んでゐたのかと、今更驚かれるのであつた。さう云へば昔、庄造が此の猫の世話を決して他人の手に委ゆだねず、毎日食事の心配をし、二三日置きにフンシの砂を海岸まで取り換へに行き、暇があると蚤のみを取つてやつたりブラシをかけてやつたりし、鼻が乾いてゐはしないか、便が軟か過ぎはしないか、毛が脱けはしないかと始終氣を

つけて、少しでも異状があれば薬を与へると云ふ風に、まめくしく尽してやるのを見て、あの怠け者によくあんな面倒が見られることよと、ますく反感を募らしたものだ、あの庄造のしたことを今は自分がしてゐるではないか。而も彼女しかは、自分の家に住んでゐるのではないのである。自分の食べるだけのものは、自分で儲けてもう妹夫婦へ払ひ込むと云ふ条件だから、まるきりの居いそ候ろうではないが、何かと気が置ける中にゐて、此の猫を飼つてゐるのである。これが自分の家であつたら、台所を漁あさつて残り物を捜すけれども、他人の家ではさうも出来ないところから、自分が食べるものを食わずに置くか、市場へ行つて何かしら見つけて来てやらねばならない。さうでなくても、つましい上にもつましく

してゐる場合であるのに、たとひ僅かの買ひ物にもせよ、リ、ーのために出銭でせんが殖ふえると云ふことは、随分痛いたごと事なのである。それにもう一つ厄介なのは、フンシであつた。蘆屋の家は浜まで五六丁の距離だつたから、砂を得るには便利であつたが、此の阪急の沿線からは、海は非常に遠いのである。尤も最初もつとの二三回は、普請場の砂があつたお蔭で助かつたけれども、生憎あいにく近頃は何処にも砂なんかありはしない。さうかと云つて、砂を換へずに放つておくと、とても臭氣が激しくなつて、しまひに階下したへまで匂つて来るので、妹夫婦が嫌な顔をする。よんどころなく、夜が更けてから彼女はそうツとスコップを持つて出かけて行つて、その辺の畑の土を掻いて来たり、小学校の運動場から滑り台の砂を盗ん



で来たり、そんな晩には又よく犬に吠えられたり、怪しい男に尾けられたり、——全く、リ、ーのためでなかつたら、誰に頼まれてこんな嫌な仕事をしよう、だが又リ、ーのためならばかう云ふ苦勞を厭いとはないとは、何としたことであらうと思ふと、返す／＼も、蘆屋の時分に、なぜ此の半分もの愛情を以て、此の獸をいつくしんでやらなかつたか、自分にさう云ふ心がけがあつたら、よもや夫との仲が不縁になりはしなかつたであらうし、此のやうな憂き目は見なかつたであらうものと、今更それが悔まれてならない。考へてみれば、誰が悪かつたのでもない、みんな自分が至らなかつたのだ。此の罪のない、やさしい一匹の獸をさへ愛することが出来ないやうな女だからこそ、夫に嫌はれたのではない

か。自分にさう云ふ欠点があつたからこそ、ハタの人間が附け込んだのではないか。…………

十一月になると、朝夕の寒さがめつきり加はつて、夜はとき／＼六甲の方から吹きおろす風が、戸の隙間から冷え／＼と沁み込むやうになつて来たので、品子とりゝとは前よりも一層喰つ着いて、ひしと抱き合つて、ふるへながら寝た。そしてとう／＼怵へきれずに、湯たんぽを使ひ始めたのであつたが、その時のりゝの喜び方と云つたらなかつた。品子は夜なく、湯たんぽのぬもりと猫の活気とでぽか／＼してゐる寢床の中で、あのゴロ／＼云ふ音を聞きながら、自分のふところの中にある獣の耳へ口を寄せて、

「お前の方がわてよりよつぽど人情があつてんなあ。」

と云つてみたり、

「わてのお蔭で、お前にまでこんな淋しい思ひさして、堪忍なあ。  
」

と云つてみたり、

「けどもう直<sup>じ</sup>きやで。もうちよつと辛抱してゝくれたら、わてと一緒に蘆屋の家へ帰れるやうになるねんで。そしたら今度と云ふ今度は、三人仲よう暮らさうなあ。」

と云つてみたりして、ひとりでに涙が湧<sup>わ</sup>いて来ると、夜更<sup>よふ</sup>けの、真つ暗な部屋の中で、リ、ーより外<sup>ほか</sup>には誰に見られる訳でもないのに、慌てゝ掛け布団をすつぽり被つてしまふのであつた。

福子が午後の四時過ぎに、今津<sup>いまづ</sup>の実家へ行つて来ると云つて出かけてしまふと、それまで奥の縁側で蘭の鉢をいぢくつてゐた庄造は、待ち構へてゐたやうに立ち上つて、

「お母さん」

と、勝手口へ声をかけたが、洗濯をしてゐる母親には、水の音が邪魔になつて聞えないらしいので、

「お母さん」

と、もう一度声を張り上げて云つた。

「店を頼むで。——ちよつと其<sup>そこ</sup>処まで行つて来るよつてになあ

。」

と、ヂャブ／＼云ふ音がふいと止まつて、

「何やて？」

と、母親のしつかりした声が障子越しに聞えた。

「僕、ちよつと其処まで行つて来るよつてに——」

「何処へ？」

「つい其処や。」

「何しに？」

「そないに執拗<sup>ひつこ</sup>う聞かんかて——」

さう云つて、一瞬間むつとした顔つきで、鼻の孔をふくらました  
が、直ぐ又思ひ返したらしく、あの持ち前の甘えるやうな口調に  
なつて、

「あのなあ、ちよつと三十分ほど、球<sup>たまつ</sup>撞きに行かしてくれへんか。  
」

「さうかてお前、球は撞かんちふ約束したのんやないか。」

「一遍だけ行かしてエな。何せもう半月も撞いてエへんよつてに。  
頼みまつさ、ほんまに。」

「えゝか、悪いか、わてには分らん。福子のある時に、答へて行  
つとくなはれ。」

「何でエな。」

その妙に力張<sup>りきば</sup>つたやうな声を聞くと、裏口の方で盥<sup>たらひ</sup>の上につくば  
つてゐる母親にも、忤<sup>こ</sup>が怒つた時にするだゞツ児じみた表情が、  
はつきり想像出来るのであつた。

「何で一々、女房に答へんなりまへんねん。えゝも悪いも福子に聞いてみなんだら、お母さんには云はれしまへんのんか。」

「さうやないけど、氣をつけてゝ下さいて頼まれてるねんが。」

「そしたらお母さん、福子の廻し者だつかいな。」

「阿呆らしいもない。」

さう云つたきり取り合はないで、又水の音を盛んにヂャブ／＼と立て始めた。

「いつたいお母さん僕のお母さんか、福子のお母さんか、孰方だす？　なあ、孰方だすいな。」  
どっち

「もう止めんかいな、そんな大きな声出して、近所へ聞えたら見つともないがな。」

「そしたら、洗濯あと後にして、一寸ちよつとこゝへ来とくなはれ。」

「もう分つてる、もう何も云はへんさかいに、何処どこなと好きなところへ行きなはれ。」

「ま、そない云はんと、一寸来なはれ。」

何と思つたか庄造は、いきなり勝手口へ行つて、流し元にしやがんでゐる母親の、シャボンの泡だらけな手てくび頸を掴むと、無理に奥の間へ引き立てゝ来た。

「なあ、お母さん、えゝ折やよつてに、一寸これ見て貰ひまつさ。  
」

「何や、急せからしう、……………」

「これ、見て御覧、——」



夫婦の居間になつてゐる奥の六畳の押入を開けると、下の段の隅ツこの、柳行李やなぎこうりと用筆筒ようだんすの隙間の暗い穴ぼこになつた所に、紅くもく／＼かたまつてゐるものが見える。

「あすこにあるのん、何や思ひなはる。」

「あれかいな。………」

「あれみんな福子の汚れ物だつせ。あんな工合に後から／＼突つ込んでいて、ちよつとも洗濯せエへんので、穢きたないもんが彼処あそこに一杯溜つてゝ、筆筒たんすの抽ひきだし出でかて開けられへんねんが。」

「をかしいなあ、あの娘このもんは先繰せんぐり洗濯屋へ出してるのんに、………」

「さうかて、まさかお腰こしだけは出されへんやろが。」

「ふうむ、あれはお腰かいな。」

「さうだんが。なんぼなんでも女の癖にあんまりだらしないさかに、僕もう呆れてまんねんけど、お母さんかて様子見てたら分つてるのんに、何で叱言こごと云うてくれしまへん？　僕にばつかりやかましいこと云うというて、福子にやつたら、こないな道楽されてゝも見ん振りしてなはんのんか。」

「こんな所にこんなもんが突つ込であること、わてが何で知るかいな。……………」

「お母さん」

不意に庄造はびつくりしたやうな声を挙げた。母が押入の段の下へもぐり込んで行つて、その汚れ物をごくごく引き出し始めたか

らである。

「それ、どないするねん？」

「此の中綺麗なかにしてやろ思うて、……………」

「止めなはれ、穢い！……………止めなはれ！」

「えゝがな、わてに任しといたら、……………」

「何ぢやいな、姑が嫁のそんなもん触いろうたりして！ 僕お母さんにそんなことしてくれ云へしまへんで。福子にさしなはれ云うてんで。」

おりんは聞えない振りをして、その薄暗い奥の方から、円くつくねてある紅い英ネルの束たばを凡およそ五つ六つ取り出すと、それを両手に抱へながら勝手口へ運んで行つて、洗濯バケツの中へ入れた。

「それ、洗うてやんなはんのんか？」

「そんなこと気にせんと、男は黙つてゐるもんや。」

「自分のお腰の洗濯ぐらゐ、何で褌子にさゝれまへん、なあお母さん。」

「うるさいなあ、わてはこれをバケツに入れて、水張つとくだけや。こないしといたら、自分で氣イ付いて洗濯するやろが。」

「阿呆らしい、氣イ付くやうな女だつかいな。」

母はあんなことを云つてゐるけれど、きつと自分が洗つてやる氣に違ひないので、なおさら尚更庄造は腹の虫が納まらなかつた。そして

着物も着換へずに、あつし厚司姿のまゝ土間の板草履を突つかけると、  
ぷいと自転車へ飛び乗つて、出かけてしまつた。

さつき球撞きに行きたいと云つたのは、ほんたうにそのつもりだつたのであるが、今の一件で急に胸がムシヤクシヤして来て、球なんかどうでもよくなつたので、何と云ふアテもなしに、ベルをやけに鳴らしながら蘆屋川沿ひの遊歩道を真つすぐ新国道へ上ると、つい業平橋<sup>なりひらばし</sup>を渡つて、ハンドルを神戸の方へ向けた。まだ五時少し前頃であつたが、一直線につゞいてゐる国道の向うに、早くも晩秋の太陽が沈みかけてゐて、太い帯になつた横流れの西日が、殆ど路面と平行に射してゐる中を、人だの車だのがみんな半面に紅い色を浴びて、恐ろしく長い影を曳きながら通る。ちやうど真正面<sup>まとも</sup>にその光線の方へ向つて走つてゐる庄造は、鋼鉄のやうにぴか／＼光る舗装道路の眩しさを避けて、俯向き加減に、首

を真横にしながら、森の公設市場前を過ぎ、小路しょうじの停留所へさしかゝつたが、ふと、電車線路の向う側の、とある病院の塀外に、畳屋の塚本が台を据ゑてせつせと畳を刺してゐるのが眼に留まると、急に元氣づいたやうに乗り着けて行つて、

「忙しおまつか。」

と、声をかけた。

「やあ」

と塚本は、手は休めずに眼でうなずいたが、日が暮れぬ間に仕事を片附けてしまはうと、畳へきゆつと針を刺し込んで拔き取りながら、

「今時分、何処へ行きはりまんね？」

「別に何処へも行かしまへん。ちよつと此の辺まで来てみましてん。」

「僕に用事でもおましたんか。」

「いゝえ、違ひま。――」

さう云つてしまつてはつとしたが、仕方がなしに眼と鼻の間へクシヤ／＼とした皺を<sup>きざ</sup>刻んで、曖昧な作り笑ひをした。

「今此処通りかゝつたので、声かけてみましたんや。」

「さうだつか。」

そして塚本は、自分の眼の前に自転車を停<sup>と</sup>めて突つ立つてゐる人間になんか、構つてゐられないと云はんばかりに、直ぐ下を向いて作業を続けたが、庄造の身になつてみれば、いくら忙しいにし

たところで、「近頃どうしてゐるか」とか、「リ、ーのことはあきらめたか」とか、そのくらゐな挨拶はしてくれてもよさうなものなのに、心外な気がしてならなかつた。それと云ふのが、福子の前ではリ、ー恋ひしきを一生懸命に押し隠して、リ、ーの「リ」の字も口に出さないであるものだから、それだけ千万無量の思ひが胸に鬱積してゐる訳で、今図らずも塚本に出遭つてみると、やれ／＼此の男に少しは切ない心の中を聞いて貰はう、さうしたら幾らか気が晴れるだらうと、すつかり当て込んでゐたのであつたが、塚本としてもせめて慰めの言葉ぐらゐ、でなければ無沙汰の詫びぐらゐ、云はなければならぬ筈なのである。なぜかと云つて、抑もリ、ー<sup>そもそ</sup>を品子の方へ渡す時に、その後どう云ふ待



遇を受けつゝあるか、とき／＼塚本が庄造の代りに見舞ひに行つて、様子を見届けて、報告をすると云ふ堅い約束があつたのである。勿論それは二人の間だけの申し合はせで、おりんや福子には絶対秘密になつてゐたのだが、しかしさう云ふ条件があつたからこそ大事な猫を渡してやつたのに、あれきり一度もその約束を実行してくれたことがなく、うま／＼人をペテンにかけて、知らん顔をしてゐるのであつた。

だが、塚本は、空惚そらとぼけてゐる訳ではなくて、日頃の商売の忙しさに取り紛れてしまつたのであらうか。こゝで遇あつたのを幸ひに、一と言ぐらゐ恨みを云つてやりたいけれども、こんなに夢中で働いてゐる者に、今更吞氣らしく猫のことなんぞ云ひ出せもしない

し、云ひ出したところで、あべこべに怒鳴り付けられはしないであらうか。庄造は、夕日がだん／＼鈍くなつて行く中で、塚本の手にある畳針ばかりがいつ迄もきら／＼光つてゐるのを、見惚れ<sup>みと</sup>るともなく見惚れながらぼんやり<sup>たらず</sup>ゐるのであつたが、ちやうど此のあたりは国道筋でも人家<sup>じんか</sup>が疎<sup>まば</sup>らになつてゐて、南側の方には食用蛙を飼ふ池があり、北側の方には、衝突事故で死んだ人々の供養のために、まだ真新しい、大きな石の国道地蔵が立つてゐるばかり。此の病院のうしろの方は田圃つゞきで、ずうと向うに阪急沿線の山々が、ついさつきまでは澄み切つた空氣の底にくつきりと襞<sup>ひだ</sup>を重ねてゐたのが、もう黄昏<sup>たそがれ</sup>の蒼い薄靄<sup>うすもや</sup>に包まれかけてゐるのである。

「そんなら、僕、失敬しまつさ。——」

「ちとやつて来なはれ。」

「そのうちゆつくり寄せて貰ひま。」

片足をペダルへかけて、二三歩とツとツと行きかけたけれども、  
やつぱりあきらめきれないらしく、

「あのなあ、——」

と云ひながら、又戻つて来た。

「塚本君、えらいお邪魔しまつけど、実はちよつと聞きたいことがおまんねん。」

「何だす？」

「僕これから、六甲まで行つてみたろか思ひまんねんけど、……」

……」

やつと一畳縫ひ終へたところで、立ち上りかけてゐた塚本は、

「何しにいな？」

と呆れた顔をして、かゝへた畳をもう一遍トンと台へ戻した。

「さうかて、あれきりどないしてるやら、さつぱり様子分れしまへんさかいにな。………」

「君、そんなこと、真面目で云うてなはんのんか。置きなはれ、男らしいもない！」

「違ひまんが、塚本君！………さうやあれへんが。」

「そやさかいに僕あの時にも念押したら、あの女に何の未練もない、顔見るだけでもケツタクソが悪い云ひなはつたやおまへんか

。」

「ま、塚本君、待つとくはなれ！　品子のことやあれへんが。猫のことだんが。」

「何と、猫？——」

塚本の眼元と口元に、突然ニツコリとほゝ笑みが浮かんだ。

「あゝ、猫のことだつか。」

「さうだんが。——君あの時に、品子があれを可愛がるかどうか、とき／＼様子見に行つてくれる云ひなはつたのん、覚えたはりまつしやろ？」

「そんなこと云ひましたかいな、何せ今年は、水害から此方えらい忙しおましたさかいに、——」

「そら分つてま。そやよつてに、君に行つて貰はう思つてエしまへん。」

せい／＼皮肉にさう云つた積りだつたのであるが、相手は一向感じてくれないで、

「君、まだあの猫のこと忘れられしまへんのんか。」

「何で忘れまつかいな。あれから此方、品子の奴がいぢめてエへんやろか、あんどちよう<sup>なつ</sup>懐いてるやろか思つたら、もうその事が心配でなあ、毎晩夢に見るぐらゐだすねんけど、福子の前やつたら、そんなことちよつとも云はれしまへんよつてに、尚のことゝが辛<sup>つろ</sup>うてく、……………」

と、庄造は胸を叩いてみせながらそを搔いた。

「……………ほんまのそこ、もう今迄にも一遍見に行こ思うてましてんけど、何せ此のところ一と月ほど、ひとりやつたらめつたに出して貰はれしまへん。それに僕、品子に会はんなんのん叶<sup>かな</sup>ひまへんよつてに、彼奴<sup>あいつ</sup>に見られんやうにして、リハーにだけそうツと会うて来るやうなことで、出来しまへんやろか？」

「そら、むづかしいおまんなあ。——」

好い加減に堪忍してくれと云ふ催促のつもりで、塚本はおろした畳へ手をかけながら、

「どないしたかて見られまんなあ。それに第一、猫に会ひに来た思はんと、品子さんに未練あるのんや思はれたら、厄介なことになるまんがな。」

「僕かてそない思はれたら叶ひまへんねん。」

「もうあきらめてしまひなはれ。人にやつてしまうたもん、どない思ふたかてシヨウがないやおまへんか、なあ石井君。——」

「あのなあ、」

と、それには答へないで、別なことを聞いた。

「あの、品子はいつも二階だつか、階下<sup>した</sup>だつか？」

「二階らしおまつけど、階下へかて降りて来まつしやろ。」

「家空<sup>うちあ</sup>けることおまへんやろか？」

「分りまへんなあ。——裁縫したはりますさかいに、大概<sup>たいがい</sup>家

らしおまつけど。」

「風呂へ行く時間、何時頃だつしやろ？」



「分りまへんなあ。」

「さうだつか。そしたら、えらいお邪魔しましたわ。」

「石井君」

塚本は、畳を抱へて立ち上つた間に、早くも一二間離れかけた自転車の後姿に云つた。

「君、ほんまに行きはりまんのか。」

「どうするかまだ分れしまへん。兎に角近所まで行つてみまつき。」

「行きなはるのんは勝手だすけど、後でゴタゴタ起つたかて、係り合ふのんイヤだつせ。」

「君もこんなこと、福子やお袋に云はんと置いとくなはれ。頼み

まつき。」

そして庄造は、首を右<sup>みぎ</sup>左<sup>ひだり</sup>へ揺さ振りく、電車線路を向う側へ渡つた。

これから出かけて行つたところで、あの一家の者達に顔を合はせないやうにして、こつそりり、うまに遇ふなんと云ふ巧い寸法に行くであらうか。いゝあんばいに裏が空地になつてゐるから、ポプラーの蔭か雑草の中にでも身を潜めて、リ、ーが外へ出て来るのを気長に待つてゐるより外に手はないのだが、生憎なことに、かう暗くなつてしまつては、出て来てくれても中々発見が困難であらう。それにもうそろく初子の亭主が勤務先から歸つて来るで

あらうし、晩飯の支度で勝手口の方が忙しくなるであらうから、さういつ迄も空巢狙ひあきすねらみたいにうろくしてゐる訳にも行かない。とすると、もつと時間の早い時に出直す方がいゝのだけれども、しかしりゝに会へる会へないは二の次として、久し振に女房の眼を偷ぬすんで、彼方此方を乗り廻せると云ふことだけでも、愉快でたまらないのであつた。実際、今日を外してしまふと、かう云ふ時はもう半月待たないと来ないのである。福子はをりく親父の所へお小遣ひをセビリに行くのだが、それが大体一と月に二度、お朔ついたち日前後と十五日前後とにきまつてゐて、行けば必ず夕飯を呼ばれ、早くて八九時頃に帰るのが例であるから、今日も今から三四時間は自由が楽しめるのであつて、もし自分さへ飢ゑ

と寒さに堪へる覚悟なら、あの裏の空地に、少くとも二時間は立つてゐる余裕があるのである。だからリ、ーが晩飯の後でぶらつきに出かける習慣を、今も改めないでゐるものとすれば、ひよつとしたら彼処で会へるかも知れない。さう云へばリ、ーは、食後に草の生えてゐる所へ行つて、青い葉を食べる癖があるので、尚更あの空地は有望な訳だ。——そんなことを考へながら、甲南学校前あたり迄やつて来ると、国粹堂と云ふラヂオ屋の前で自転車を停めて、外から店を覗いてみて、主人がゐるのを確かめてから、

「今日は」

と、表のガラス戸を半分ばかり開けた。

「えらい済んまへんけど、二十錢貸しとくなはれしまへんか。」

「二十錢でよろしおまんのか。」

知らない顔ではないけれども、いきなり飛び込んで来て心やすさうに云はれる程の仲やあれへん、と、さう云ひたげに見えた主人は、二十錢では断りもならないので、手提金庫から十錢玉を二つ取り出して、黙つて掌<sup>てのひら</sup>へ載せてやると、直ぐ向う側の甲南市場へ駈け込んで、アンパンの袋と筍<sup>たけ</sup>の皮包を懷ろに入れて戻つて来て、  
「ちよつと台所使はしとくなはれ。」

人が好いやうでへんにづう／＼しいところのある彼は、さう云ふことには馴れたものなので、「何しなはんね」と云はれても「訳がありまんねん」とばかり、ニヤ／＼しながら勝手口へ廻つて行

つて、筍たけの皮包かしわの鶏かひの肉をアルミニウムの鍋へ移すと、瓦斯ガスの火を借りて水煮みずだきにした。そして「済んまへんなあ」を二十遍ばかりも繰り返しながら、

「いろ／＼無心云ひまつけど、今一つ聴いとくはれしまへんか。  
」

と、自転車に附けるランプの借用を申し込んだが、「此れ持つて行きなはれ」と主人が奥から出して来てくれたのは、「魚崎町三好屋」と云ふ文字のある、何処どこかの仕出屋しだしやの古提灯ふるぢようちんであつた。  
「ほう、えらい骨董物だんなあ。」

「それやつたら大事おまへん。ついでの時に返しとくはなはれ。」  
庄造は、まだおもてが薄明るいので、その提灯を腰に挿して出か

けたが、阪急の六甲の停留所前、「六甲登山口」と記した大きな標柱の立つてゐる所まで来て、自転車を角の休み茶屋に預けて、そこから二三丁上にある目的の家の方へ、少し急なだら／＼路を登つて行つた。そして家の北側の、裏口の方へ廻つて、空地の中へ這入り込むと、二三尺の高さに草がぼう／＼と生えてゐるとかたまりの叢くさむらのかげにしやがんで、息を殺した。

こゝでさつきのアンパンを咬かじりながら、二時間の間辛抱してみよう、そのうちにリ、ーが出て来てくれたら、お土産の鶏かしわの肉を与へて、久しぶりに肩へ飛び着かせたり、口の端を舐めさせたり、楽しいいちやつき合ひをしようと、さう云ふ積りなのであつた。いつたい今日は面白くないことがあつたのでアテもなく外へ飛び

出したら、足が自然に西の方へ向いたばかりでなく、塚本なんぞに出遭つたものだから、とう／＼途中で決心をして、此処まで延のしてしまつたのだが、かうなることゝ分つてゐたら外套を着て来ればよかつたのに、厚司あつしの下に毛糸のシヤツを着込んだだけでは、流石さすがに寒さが身に沁みる。庄造は肩をぞくツとさせて、星がいちめんに輝き始めた夜空を仰いだ。板草履を穿はいた足に冷めたい草の葉が触れるので、ふと気が付いて、帽子だの肩だのを撫でゝみると、夥おびただしい露が降りてゐる。成程なほど、これでは冷える訳だ、かうして二時間もうづくまつてゐたら、風邪を引いてしまふかも知れない。だが庄造は、台所の方から魚を焼く匂が匂つて来るので、リ、ーがあれを嗅ぎ付けて何処かゝら歸つて来さうな気がして、





異様な緊張を覚えるのであつた。彼は小さな声を出して、「リ、ーや、リ、ーや」と呼んでみた。何か、あの家の人達には分らないで、猫にだけ分る合図の方法はないものかとも思つたりした。

彼がつくばつてゐる叢の前の方に、葛の葉が一杯に繁つてゐて、その葉の中でとき／＼ピカリと光るものがあるのは、多分夜露の玉か何かが遠くの方の電燈に反射してゐるせゐなのだけれども、さうと知りつゝ、その度毎に猫の眼か知らんとはつと胸を躍らせた。……あ、リ、ーかな、やれ嬉しや！ さう思つた途端に動悸が搏ち出して、鳩尾みぞおちの辺がヒヤリとして、次の瞬間に直ぐ又がつかりさせられる。かう云ふと可笑おかしな話だけれども、まだ庄造はこんなヤキモキした心持を人間に對してさへ感じたことはな

いのであつた。せい／＼カフエエの女を相手に遊んだぐらゐが  
 関の山で、恋愛らしい経験と云へば、前の女房の眼を掠<sup>かす</sup>めて福子  
 と逢引してゐた時代の、楽しいやうな、懊<sup>じ</sup>れつたいやうな、変に  
 わく／＼した、落ち着かない気分、——まああれぐらゐなもの  
 なのだが、それでもあれは両方の親が内々で手引をしてくれ、品  
 子の手前を巧く胡麻化してくれたので、無理な首尾をする必要も  
 なく、夜露に打たれてアンパンを咬るやうな苦勞をしないでもよ  
 かつたのだから、それだけ真剣味に乏しく、逢ひたさ見たさもこ  
 んなに一途<sup>いちず</sup>ではなかつたのであつた。

庄造は、母親からも女房からも自分が子供扱ひにされ、一本立ち  
 の出来ない低能児のやうに見倣<sup>みな</sup>されるのが、非常に不服なのであ

るが、さればと云つてその不服を聴いてくれる友達もなく、悶々の情を胸の中に納めてゐると、何となく独りぽつちな、頼りない感じが湧いて来るので、そのために尚り、―を愛してゐたのである。実際、品子にも、福子にも、母親にも分つて貰へない淋しい気持を、あの哀愁に充ちたり、―の眼だけがほんたうに見抜いて、慰めてくれるやうに思ひ、又あの猫が心の奥に持つてゐながら、人間に向つて云ひ現はす術を知ら<sup>すべ</sup>ない畜生の悲しみと云ふやうなものを、自分だけは読み取ることが出来る氣がしてゐたのであつたが、それがお互ひに別れゝにされてしまつて四十余日になるのである。そして一時は、もうそのことを考へないやうに、なるべく早くあきらめるやうに努めたことも事実だけれども、母や女

房への不平が溜つて、その鬱憤の遣り場がなくなつて来るに従ひ、いつか再び強い憧れが頭を擡<sup>もた</sup>げて、抑へきれなくなつたのであつた。全く、庄造の身になつてみると、あゝ云ふ厳しい足止めをされて、出るにも入るにも干渉を受けたのでは、却<sup>かえ</sup>つて恋ひしさを焚<sup>た</sup>き付けられるやうなもので、忘れようにも忘れる暇がなかつたのであるが、それにもう一つ氣になつたのは、あれきり塚本から何の報告もないことであつた。あんなに約束しておきながら、どうして何とも云つて来てくれないのか。仕事が忙しいのなら已<sup>や</sup>むを得ないが、ひよつとするとさうでなく、彼に心配させまいとして、何か隠してゐるのではないか。たとへば品子にいちめられて、食ふや食はずであるためにひどく衰弱してしまつたとか、逃げて

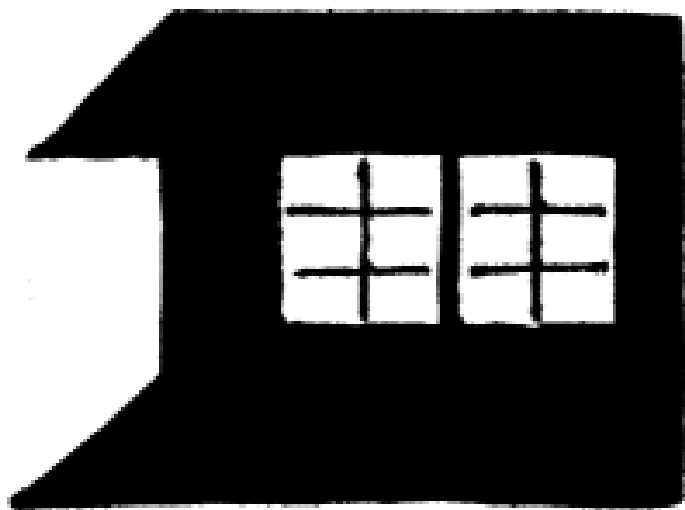
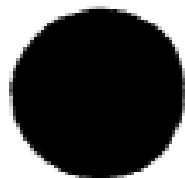
出たきり行衛<sup>ゆくえ</sup>不明になつたとか、病死したとか、云ふやうなことがあるのではないか。あれから此方、庄造はよくそんな夢を見て、夜中にはつと眼を覚ますと、何処かで「ニヤア」と啼いてゐるやうに思へるので、便所へ行くやうな風をしながら、そうつと起きて雨戸を開けてみたことも、一度や二度ではないのであるが、あまりたび／＼さう云ふ幻<sup>あざむ</sup>に欺かれると、今聞いた声や夢に見た姿は、リ、ーの幽霊なのではないか、逃げて来る路<sup>みち</sup>で野たれ死にをして、魂だけが戻つたのではないのかと、そんな氣がして、ぞうつと身ぶるひが出たこともある。だが又、いくら品子が意地の悪い女でも、塚本が無責任でも、まさかり、ーに變つたことが起つたら黙つてゐる筈もあるまいから、便りのないのは無事に暮らし

てゐる証拠なのだ、不吉な想像が浮かぶたびに打ち消し／＼して来たのであるが、それでも感心に女房の云ひつけを忠実に守つて、一度も六甲の方角へ足を向けたことがなかつたと云ふのは、監視が厳しかつたばかりでなく、品子の網に引つかゝるのが不愉快だからであつた。彼にはリ、ーを引き取つた品子の真意と云ふものが、今でもハツキリしないのだけれども、事に依つたら、塚本が報告を怠つてゐるのも品子のさしがねではないのか、彼奴はさう云ふ風にしてわざと己に氣を揉ませて、おびき寄せようと云ふ腹ではないのかと、そんな邪推もされるので、リ、ーの安否を確かめたいと願ふ一方、見す／＼彼奴の罨に簞はまつて溜るものと云ふ反感が、それと同じくらゐ強かつたのであつた。彼は何と

かしてリ、ーには会ひたいが、品子に掴まることはイヤで溜らなかつた。「とう／＼やつて来ましたね」と、彼奴がへんに利口ぶつて、得意の鼻をうごめかすかと思ふと、もうその顔つきを浮かべたゞけでムシヅが走つた。元来庄造には彼一流の狡さ<sup>ずる</sup>があつて、いかにも気の弱い、他人の云ふなり次第になる人間のやうに見られてゐるのを、巧みに利用するのであるが、品子を追ひ出したのが矢張その手で、表面はおりんや福子に操られた形であるけれども、その実誰よりも彼が一番彼女を嫌つてゐたかも知れない。そして庄造は、今考へても、いゝことをした、いゝ気味だつたと思ふばかりで、不憫<sup>ふびん</sup>と云ふ感じは少しも起らないのであつた。

現に品子は、電燈のともつてゐる二階のガラス窓の中にあるのに





違ひないのだが、雑草のかげにつくばひながらじつとその灯を見上げてみると、又してもあの、人を小馬鹿にしたやうな、賢女振った顔が眼先にちらついて、胸糞が悪くなつて来る。折角こゝまで来たのであるから、せめて「ニヤア」と云ふなつかしい声を余<sup>よ</sup>所<sup>そ</sup>ながらも聞いて帰りたい、無事に飼はれてゐることが分りさへしたら、それだけでも安心であるし、こゝへ来た念が届くのであるから、いつそのことそうつと裏口を覗いてみたら、……アハよく行つたら、初子をこつそり呼び出して、おみやげの鶏<sup>かしわ</sup>の肉を渡して、近状を聞かして貰つたら、……と、さう思ふのであるが、あの窓の灯を見て、あの顔を心に描くと、足がすくんでしまふのである。うつかりそんな真似をしたら、初子がどう云ふ感

違ひをして、二階の姉を呼びに行かないものでもないし、少くとも後でしやべることは確かであるから、「そろ／＼計略が図に中<sup>あた</sup>つて来た」などと、己惚れるだけでも癩<sup>しやく</sup>に触る。とすると、矢張此の空地に根氣よくうづくまつてゐて、リ、ーがこゝを通りかゝる偶然の機会を捉へるより外はないのであるが、しかし今迄待つて駄目なら、とても今夜は覚<sup>おぼ</sup>つかない。庄造はもう、袋の中のアパンをみんな食べてしまった。そしてさつきから一時間半ぐらゐは経つたやうな氣がするので、だん／＼家の方の首尾が心配になつて来た。母親だけなら面倒はないが、福子が先に歸つて来てゐたら、今夜一と晩ぢゆう寝かして貰へないで、痣<sup>あざ</sup>だらけにされる。それもいゝけれども、又明日から監視が嚴重になる。だが、

一時間半も待つあひだに微かな啼きかすも洩れて来ないのは、何だか変だ、ひよつとしたら、此の間からたび／＼見た夢が正夢で、もう此の家にゐないのではないか。さつき魚を焼く匂がした時が一家の夕飯だつたとすると、リ、ーもあの時何かしら与へられるであらうし、さうすればきつと草を食べに出て来るのだが、来ないのを見るとどうも怪しい。……

庄造は、とう／＼こら怵へきれなくなつて、雑草の中から身を起すと、裏木戸の際まで忍んで行つて、隙間へ顔をあてゝみた。と、階下したはすっかり雨戸が締まつてゐて、子供を寝かしつけてゐるらしい。初子の声かとぎれ／＼に聞えて来る外には、何の物音もしない。二階のガラス障子にでも、ほんの一瞬間でいゝからさつと影が写

つてくれたらどんなに嬉しいか知れないのに、ガラスの向うに白いカーテンが静かに垂れてゐるばかりで、その上の方が薄暗く、下の方が明るくなつてゐるのは、品子が電燈を低く下して、夜作よなべをしてゐるのであらう。ふと庄造は、あかりの下で一心に針を運びつゝある彼女の傍そばに、リ、ーがおとなしく背中を円めて、「の」の字なりに臥ねころびながら、安らかな眠むさぼを貪つてゐる平和な光景を眼前に浮かべた。秋の夜長の、またゝきもせぬ電燈の光が、リ、ーと彼女とたゞ二人だけを一つ圈わの中に包んでゐる外は、天井の方までぼうつと暗くなつてゐる室内。……夜が次第に更けて行く中で、猫はかすかに舐いを搔びき、人は黙々と縫ひ物をしてゐる、佗たびしいながらもしみりとした場面。……あのガラス窓の中

に、さう云ふ世界が繰りひろげられてゐるとしたら、——何か奇蹟的なことが起つて、リ、——と彼女とがすっかり仲好しになつてゐたとしたら、——もしほんたうにそんな光景を見せられたら、焼餅を焼かずにゐられるだらうか。正直のところ、リ、——が昔を忘れてしまつて現状に満足してゐられても、矢張腹が立つであらうし、さうかと云つて、虐待されてゐたり死んでゐたりしたのでは尚悲しいし、執方にしても気が晴れることはないのだから、いつそ何も聞かない方がいゝかも知れない。庄造は、途端に階下とたんの柱時計が「ぼん、………」と、半を打つのを聞いた。七時半だ、——と思ふと、彼は誰かに突き飛ばされたやうに腰を浮かしたが、二た足三足行つてから引つ返して来て、まだ大事さうに懷に

入れてゐた筍の皮包を取り出すと、それを木戸口や、五味箱の上や、彼方此方へ持つて行つてウロ／＼した。何処か、リ、ーだけが気が付いてくれるやうな所へ置いて行きたいが、叢の中では犬に嗅ぎ付けられさうだし、此の辺へ置いたら家の者が見つけるであらうし、巧い方法はないか知らん。いや、もうそんなことに構つてはゐられぬ。遅くも今から三十分以内に帰らなかつたら、又一と騒ぎ起るかも知れぬ。「あんた、今頃まで何してゝん!」——と、さう云ふ声が俄かに耳のハタで聞えて、福子のイキリ立つた劍幕があり／＼と見える。彼は慌てゝ葛の葉の繁つてゐる間へ、筍の皮を開いて置いて、両端へ小石を載せて、又その上から適当に葉を被せた。そして空地を横ツ飛びに、自転車を預けた茶

屋のところまで夢中で走った。

その晩、庄造よりも二時間程おくれて帰つて来た福子は、弟を連れて拳闘を見に行つた話などをして、ひどく機嫌が好かつた。そして明くる日、少し早めに夕飯を済ますと、

「神戸へ行かして貰ひまつせ。」

と、夫婦で新開地の聚楽館じゅらくかんへ出かけた。

おりんの経験だと、福子はいつも今津の家へ行つて来た当座、つまり懐ふところにお小遣のある五六日か一週間のあひだと云ふものは、きまつて機嫌がいいのである。此のあひだに彼女は盛んに無駄使ひをして、活動や歌劇見物などにも、二度ぐらゐは庄造を誘つて行



く。従つて夫婦仲も睦じく、至極円満に治まつてゐるのだが、一週間目あたりからそろ／＼懷が淋しくなつて、一日家でごろ／＼しながら、あいだぐ間食ひをしたり雑誌を読んだりするやうになり出すと、とき／＼亭主にくちごごと口叱言を云ふ。もつと尤も庄造も、女房の景氣のいゝ時だけ忠実振りを發揮して、だん／＼出るものが出なくなると、現金に態度を変へ、浮かぬ顔をしてなまへんじ生返事をする癖があるのだが、結局双方から飛とばつちりを食ふ母親が、一番割が悪いことになる。だからおりんは、福子が今津へ駈け付ける度に、やれ／＼これで当分は安心だと思つて、内々ほつとするのであつた。で、今度もちやうどさう云ふ平和な一週間が始まつてゐたが、神戸へ行つてから三四日たつた或る日の夕方、亭主と二人晩飯のチ

ヤブ台に向つてゐた福子は、

「こなひだの活動、ちよつとも面白いことあれへなんだなあ。」  
と、自分も行ける口なので、ほんのり眼のふちへ酔ひを出しながら、

「——なあ、あんたどない思ふた？」

と、さう云つて銚子を取り上げると、庄造がそれを引つたくるやうにして此方からさした。

「一つ行こ。」

「もう、あかん。……酔うたわ、わて。」

「まあ、行こ、もう一つ。……」

「家で飲んだかて、おいしいことあれへん。それより明日何処ぞ

へ行けへん？」

「えゝなあ、行きたいなあ。」

「まだお小遣ちよつとも使うてエへんねんで。……こなひの晩、家で御飯たべて出て、活動見たゞけやつたやろ、そやさかいに、まだたあんと持つてゐるねん。」

「何処にせう、そしたら？……」

「宝塚、今月は何やつてゐるやろ？」

「歌劇かいな。——」

後に旧温泉と云ふ楽しみはあるにしてからが、何だかもう一つ気が乗らない顔つきをした。

「——そないにたんとお小遣あるのんやつたら、もつと面白い

ことないやろか。」

「何ぞ考へてエな。」

「紅葉見に行けへん？」

「みのお箕面かいな。」

「箕面はあかんねん、こなひだの水ですつくりやられてしもてん。それより僕、久し振りで有馬ありまへ行つてみたいねんけど、どうや、賛成せエへんか。」

「ほんに、……あれ、いつやつたやろ？」

「もうちやうど一年ぐらゐ……いや、さうやないわ、あの時河か鹿しかが啼ないてたわ。」

「さうや、もう一年半になるで。」

それは二人が人目を忍ぶ仲になり出して間もない時分、或る日瀧たきみち

道の終点で落ち合ひ、神しんゆう有電車で有馬へ行つて、御所ごしよの坊ぼうの

二階座敷で半日ばかり遊んで暮らしたことがあつたが、涼しい溪たにがわ

川の音を聞きながら、ビールを飲んで寝たり起きたりして過した、楽しかった夏の日のことを、二人ともはつきり思ひ出した。

「そしたら、又御所の坊の二階にせうか。」

「夏より今の方がえゝで。紅葉見て、温泉に這入つて、ゆつくり晩の御飯食べて、——」

「さうせう、さうせう、もうそれにきめたわ。」

その明くる日は早お昼の予定であつたが、福子は朝の九時頃からぽつ／＼身支度に取りかゝりながら、

「あんた、汚い頭やなあ。」

と、鏡の中から庄造に云つた。

「さうかも知れん、もう半月ほど床屋へ行けへんさかいにな。」

「そしたら大急ぎで行つて来なはれ、今から三十分以内に。――

――

「そらえらいこツちや。」

「そんな頭してたら、わてよう一緒に歩かんわ。――早うしなはれ！」

庄造は、女房が渡してくれた一円札を、左の手に持つてヒラ／＼させながら、自分の店から半丁程東にある床屋の前まで駈けて行つたが、いゝあんばいに客が一人も来てゐないので、

「早いとこ頼みまつさ。」

と、奥から出て来た親方に云つた。

「何処ぞ行きはりまんのんか。」

「有馬へ紅葉見に行きまんね。」

「そら宜しおまんなあ、奥さんよろも一緒だつか？」

「さうだね。——早お昼たべて出かけるさかい、三十分で頭刈つて来なはれ云はれてまんね。」

が、それから三十分過ぎた時分、

「お楽しみだんなあ、ゆつくり行つて来なはれ。」

と、背中から親方が浴びせる言葉を聞き流して、家の前まで戻つて来て、何心なく店へ一と足踏み込むと、そのまゝ土間に立ちす

くんでしまった。

「なあ、お母さん、何で今日までそれ隠してはりましたん。……

…」

と、突然さう云ふたゞならぬ声が奥から聞えて来たからである。

「……………何でそんなことがあつたら、わてに云うとくはなれしまへん。……………そしたらお母さん、わての味方してるみたいに見せかけといて、いつもそんなことさせてはつたんと違ひまつか。……

……………」

福子が大分お冠かんむりを曲げてゐるらしいことは甲かん高だかい物の云ひ方で分る。母親の方は明かに遣り込められてゐる様子で、たまに一言二言ぐらゐる口返答をするけれども、胡麻化すやうにコソく



と云ふので、よく聞えない。福子の怒鳴る声ばかりが筒抜けに響いて来るのである。

「……………何？ 行つたとは限らん？……………阿呆らしい！ 人の家の台所借つて、<sup>かしわ</sup>鶏の肉煮<sup>た</sup>いたりして、リ、ーの所<sup>ところ</sup>やなかつたら、<sup>どこ</sup>何所へ持つて行きまんね。……………それにしたかて、あの<sup>ちようちん</sup>提灯持つて帰つて、あんな所に直してあつたこと、お母さん知つたはりましたんやろ？……………」

彼女が母親を掴まへて、あんなキン／＼した声を張り上げること  
はめつたにないのだが、しかしたつた今、彼が床屋へ行つてゐた  
僅かな間に、どうやら先日の国粋堂が、あの時の立て換へと古提  
灯とを取り返しに來たのだと見える。ありていに云ふと、あの晩

庄造はあの提灯を自転車の先にぶら下げて歸つて、福子に見咎められないやうに、物置小屋の棚の上に押し上げて置いたのであるが、お袋には見当がついてゐた筈だから、出して渡してやつたのかも知れない。だが国粹堂は、いつでもいゝやうにと云つてゐながら、何で取り返しに來たのだらう。まさかあんな古提灯が惜しいこともあるまいに、此の辺についてゝもあつたのだらうか、それとも二十錢を借りつ放しにされたのが、腹が立つたのだらうか。それに又、親父が來たのか、小僧が來たのか知らないが、かしわ鶏の話までして行かないでもないか。

「……………わてはなあ、相手がリ、ーだけやつたら、何もうるさいこと云へしまへんで。リ、ーに会ひに行く云うても、リ、ーだけ

やあれへんさかいに、云ひまんねんで。いつたいお母さん、あの  
人とグルになつて、わてを欺すやうな<sup>だま</sup>こととして、済むと思つたは  
りまんのんか。」

さう云はれると、流石<sup>さすが</sup>のおりんもグウの音も出ないで、小さくな  
つてゐるのであるが、忤<sup>こ</sup>の代りに怒られてゐるのは可哀さうのや  
うでもあり、一寸いゝ気味のやうでもある。何にしても庄造は、  
自分がゐたら中々福子の怒り方が此のくらゐでは済むまいと思ふ  
と、危<sup>あやう</sup>く虎口<sup>ここう</sup>を逃れた気がして、スハといへば戸外<sup>おもて</sup>へ飛び出せる  
やうに、身構へをしなから立つてゐると、

「……………いゝえ、分つてま！ あの人六甲へ遣つたりして、今度  
はわてを追ひ出す相談してなはるねん。」

と、云ふのにつゞいてどたと云ふ物音がして、

「待ちいな！」

「放しとくなはれ！」

「さうかて、何処へ行くねんな。」

「お父さん所<sup>とこ</sup>へ行つて来ます、わての云ふことが無理か、お母さんの云ふことが無理か、——」

「ま、今庄造が戻るさかいに——」

どたん、どたん、と、二人が盛んに争ひながら店の方へ出て来さうなので、慌てゝ庄造は往来へ逃げ延びて、五六丁の距離を夢中で走つた。それきり後がどうなつたことやら分らなかつたが、気が付いてみると、いつか自分は新国道のバスの停留所の前に来て、

さつき床屋で受け取った釣銭の銀貨を、まだしつかりと手の中に握つてゐた。

ちやうどその日の午後一時頃、品子が朝のうちに仕上げた縫物を、近所まで届けて来ると云つて、不斷着の上に毛糸のシヨールを引つけて、小走りに裏口から出て行つたあと、初子がひとり台所で働いてゐると、その障子をごそツと一尺ばかり開けて、せい／＼息を切らしながら庄造が中を覗き込んだので、

「あらツ」

と、飛び上りさうにすると、ピヨコンと一つお時儀じぎをしながら笑つてみせて、

「初ちやん、……………」

と云つてから、後ろの方に気を配りつゝ急にひそく声になつて、  
「……………あの、今此処から品子出て行きましたやろ？」  
と、セカ／＼した早口で云つた。

「……………僕今そこで会うてんけど、品子は氣イ付けしまへなんだ。  
僕あのポプラーの蔭に隠れてましたよつてにな。」

「何ぞ姉さんに用だつか？」

「滅<sup>めっそう</sup>相な！　リ、ーに会ひに來ましてんが。——」

そして、そこから庄造の言葉は、さも思ひ余つた、哀れつぽい切ない声に變つた。

「なあ、初ちやん、あの猫何処にいます？……………濟んまへんけ

ど、ほんのちよつとでえゝさかい、会はしとくなはれ！」

「何処ぞ、その辺にいてしまへんか。」

「そない思うて、僕此の近所うろくして、もう二時間も彼処に立つてましてんけど、ちよつとも出て来よれしまへんねん。」

「そしたら、二階にいてるかしらん？」

「品子もう直ぐ戻りまつしやろか？　今頃何処へ行きましたんや？」

「ほんそこまで仕立物届けに。——二三丁の所だすよつて、直ぐ帰りまつせ。」

「あゝ、どうしよう、あゝ困つた。」

さう云つて仰山に体をゆすぶつて、じだんだ地団駄を踏みながら、

「なあ、初ちゃん、頼みます、此の通りや。――」

と、手を擦り合はせて拝む真似をした。

「――後生一生の願ひだす、今の間に連れて来とくなはれ。」

「会うて、どないしやほりまんね。」

「どうもかうもせえしまへん。無事な顔一と眼見せてもらたら、気が済みまんねん。」

「連れて帰りはれしまへんやろなあ？」

「そんなことしまつかいな。今日見せてもらたら、もうこれつきり来<sup>け</sup>えしまへん。」

初子は呆れた顔をして、穴の明くほど庄造を視詰めてゐたが、何と思つたか黙つて二階へ上つて行つて、直ぐ段梯子の中段まで戻



つて来ると、

「いてまつせ。——」

と、台所の方へ首だけ突ん出した。

「いてまつか？」

「わて、よう抱きまへんよつて、見に来とくなはれ。」

「行つても大事おまへんやろか。」

「直ぐ降りとくなはれや。」

「宜し<sup>よろ</sup>おま。——そしたら、上らして貰ひまつさ。」

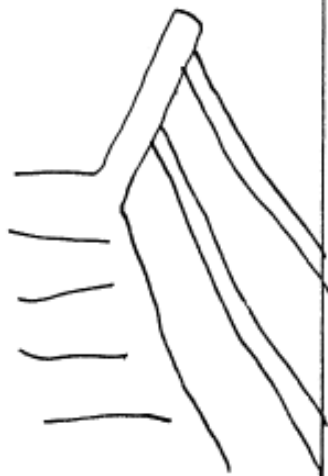
「早いことしなはれ！」

庄造は、狭い、急な段梯子を上る間も胸がドキ／＼した。やう／＼日頃の思ひが叶つて、会ふことが出来るのは嬉しいけれども、

どんな風に変つてゐるだらうか。野たれ死にもせず、行くへ不明にもならないで、無事に此の家やにゐてくれたのは有難いが、虐待されて、痩せ衰へてゐなければいゝが、……まさか一と月半の間に忘れる筈はないだらうけれど、なつかしさうに傍へ寄つて来てくれるか知らん？ それとも例の、羞はにか没んで逃げて行くか知らん？……蘆屋の時代に、二三日家を空けたあとで歸つて来ると、もう何処へも行かせまいとして、縫すがり着いたり舐め廻したりしたものであつたが、もしもあんな風にされたら、それを振り切るのに又もう一度辛い思ひをしなければならぬ。……

「此処だつせ。——」

晴れくとした午後の外光を遮つて、窓のカーテンが締まつてゐ



るのは、大方用心深い品子が出て行く時にさうしたのであらうか。  
——そのために室内がもや／＼と翳<sup>かげ</sup>つて、薄暗くなつてゐる中に、信<sup>しがらき</sup>樂焼のナマコの火鉢が置いてあつて、なつかしいりゝゝはその傍に、座布団を重ねて敷いて、前脚を腹の下へ折り込んで、背を円くしながらうつら／＼眼をつぶつてゐた。案じた程に痩せてもゐないし、毛なみもつや／＼としてゐるのは、相当に優遇されてゐるからであらう。思つたよりも大事にされてゐる証拠には、彼女のために専用の座布団が二枚も設けてあるばかりではない、たつた今、お昼の御馳走に生卵を貰つたと見えて、きれいに食べ尽した御飯のお皿と、卵の殻とが、新聞紙に載せて部屋の間隅に寄せてあり、又その横には、蘆屋時代と同じやうなフンシさへ置

いてあるのである。と、突然庄造は、久しい間忘れてゐたあの特有の匂を嗅いだ。嘗て我が家の柱にも壁にも床にも天井にも沁み込んでゐたあの匂が、今は此の部屋に籠つてゐるのであつた。彼は悲しみがこみ上げて来て、

「リ、ー、………」

と覚え<sup>だみこえ</sup>ず濁声を挙げた。するとリ、ーはやう／＼それが聞えたのか、どんよりとした慵<sup>ものう</sup>げな瞳を開けて、庄造の方へひどく無愛想な一瞥<sup>いちべつ</sup>を投げたが、たゞそれだけで、何の感動も示さなかつた。彼女は再び、前脚を一層深く折り曲げ、背筋の皮と耳<sup>じ</sup>朶とをブルン！と寒さうに痙攣させて、睡<sup>ねむ</sup>くて溜<sup>たま</sup>らぬと云ふやうに眼を閉ぢてしまつた。

今日はお天氣がいゝ代りに、空氣が冷え／＼と身に沁むやうな日であるから、リ、ーにしたら火鉢の傍を離れるのがイヤなのであらう。それに胃の腑がふくらんでゐるので、尚なおさら更大儀なのでもあらう。此の動物の無精な性質を呑み込んでゐる庄造は、かう云ふそつけない態度には馴れてゐるので、格別訝あやしみはしなかつたが、でも氣のせゐるか、その夥おびただしく眼やにの溜つた眼のふちだの、妙にしよんぼりとうづくまつてゐる姿勢だのを見ると、僅かばかり会はなかつた間に、又いちじるしく老いぼれて、影が薄くなつたやうに思へた。分けても彼の心を打つたのは、今の瞳の表情であつた。在来とてもこんな場合に睡さうな眼をしたとは云へ、今日のはまるで行路病こうろびようしや者のそのやうな、精せいも根こんも涸かれ果てた、

疲労しきつた色を浮かべてゐるではないか。

「もう覚えてエしまへんで。——畜生だんなあ。」

「阿呆らしい、人が見てたらあないに空そらとほ惚けまんねんが。」

「さうだつしやろか。………」

「さうだんが。………そやさかいに、………済んまへんけど、ほんちよつとの間ま、初ちやん此処に待つてゝくれて、此の襖ふすま締めさしとくなはれしまへんか。………」

「そないして、何しやはりまんね。」

「何もせえしまへん。………たゞ、あの、ちよつと、………膝の上に抱いてやりまんねん。………」

「さうかて、姉さん歸つて来まつせ。」

「そしたら、初ちゃん、そつちの部屋から門見張つて、見えた  
ら直ぐに知らしとくなはれ。頼みまつさ。……」

襖に手をかけてさう云つてゐるうちに、もう庄造はずるゝと部屋へ這入つて、初子を外へ締め出してしまった。そして、

「リ、ー」

と云ひながら、その前へ行つて、さし向ひにすわつた。

リ、ーは最初、折角せつかく昼寝してゐるのにうるさい！ と云ふやう

な横着さうな眼をしばだいたいが、彼が眼やにを拭いてやつたり、膝の上に乗せてやつたり、頸すぢを撫でゝやつたりすると、格別嫌な顔もしないで、される通りになつてゐて、暫くするうちに咽のどの喉をゴロ／＼鳴らし始めた。



「リ、ーや、どうした？ 体の工合悪いことないか？ 毎日々々、

可愛がつてもろてるか？——」

庄造は、今にリ、ーが昔のいちやつきを思ひ出して、頭を押し着けに来てくれるか、顔を舐め廻しに来てくれるかと、一生懸命いろ／＼の言葉を浴びせかけたが、リ、ーは何を云はれても、相変らず眼をつぶつたまゝゴロ／＼云つてゐるだけであつた。それでも彼は背中<sup>の</sup>皮を根氣よく撫でゝやりながら、少し心を落ち着けて此の部屋の中を眺めてみると、あの几帳面<sup>きちようめん</sup>で癩<sup>かんしよう</sup>性<sup>せう</sup>な品子の遣り方が、ほんの些細な端々<sup>はしばし</sup>にもよく現はれてゐるやうに感じた。たとへば彼女は、僅か二三分の間留守にするにも、ちゃんとかうしてカーテンを締めて行くのである。のみならず此の四畳

半の室内に、鏡台だの、箆笥だの、裁縫の道具だの、猫の食器だの、便器だの、さま／＼なものやを並べて置きながら、それらが一糸乱れずに、それ／＼整然と片寄せられて、鏝こての突き刺してある火鉢の中を覗いてみても、炭火を深くいけ込んだ上に、灰が綺麗に筋目を立てゝならしてあり、三徳の上に載せてある瀬戸引の薬罐やかんまでが、研ぎ立てたやうにピカ／＼光つてゐるのである。が、それはまあ不思議はないとしても、奇妙なのはあの皿に残つてゐる卵の殻だつた。彼女は自分で食くひ扶ぶ持ちを稼いでゐるので、決して楽ではないであらうに、貧しい中でもリ、ゝに滋養分を与へると見える。いや、さう云へば、彼女が自分で敷いてゐる座布団に比べて、リ、ゝの座布団の綿の厚いことはどうだ。いつたい

彼女は何と思つて、あんなに憎んでゐた猫を大事にする氣になつたのであらう。

考へてみると庄造は、云はゞ自分の心から前の女房を追ひ出してしまひ、此の猫にまでも数々の苦勞をかけるばかりか、今朝は自分が我が家のしきい閤をまた跨ぐことが出来ないで、ついふら／＼と此処へやつて来たのであるが、此のゴロ／＼云ふ音を聞きながら、咽むせるやうなフンシの匂を嗅いでゐると、何となく胸が一杯になつて、品子も、リ、ーも、可哀さうには違ひないけれども、誰にもまして可哀さうなのは自分ではないか、自分こそほんたうの宿なしではないかと、さう思はれて来るのであつた。

と、その時ばた／＼と足音がして、

「姉さんもうついその角まで来てまつせ。」

と、初子が慌しく襖を開けた。

「えッ、そら大変や!」

「裏から出たらあきまへん!……表へ、……表へ廻んなはれ  
!……穿<sup>は</sup>き物<sup>もの</sup>わてが持つて行<sup>い</sup>たげる! 早よ、早よ!」

彼は転げるやうに段梯子を駈け下りて、表玄関へ飛んで行つて、  
初子が土間へ投げてくれた板草履を突つかけた。そして往来へ忍  
び出た途端に、チラと品子の後影が、一と足違ひで裏口の方へ曲  
つて行つたのが眼に留まると、恐い物にでも追はれるやうに反対  
の方角へ一散に走つた。

(昭和十一年一月号、七月号「改造」)





## 青空文庫情報

底本：「猫と庄造と二人のをんな」中公文庫、中央公論新社

2013（平成25）年7月25日初版発行

底本の親本：「谷崎潤一郎全集 第十四卷」中央公論社

1982（昭和57）年6月25日

初出：「改造 新年号 第十八卷第一号」

1936（昭和11）年1月1日発行

「改造 七月特大号 第十八卷第七号」

1936（昭和11）年7月1日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-

86)を、大振りにつくっています。

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそつて、ルビの拗音、促音は小書きしました。

※誤植を疑った箇所を、底本の親本の表記にそつて、あらためました。なお、底本の親本と初刊本「猫と庄造と二人のをんな」創元社（1946（昭和21）年9月20日再版発行）と「谷崎潤一郎全集第十八巻」中央公論新社（2016（平成28）年5月10日初版発行）との表記は同じでした。

※安井曾太郎（1888年5月17日～1955年12月14日）の挿絵を同梱しました。

※猫・カーテン・窓の画は「猫と庄造と二人のをんな」創元社、



昭和14年9月10日普及版第13版発行からとりました。底本は白黒画像です。

入力：砂場清隆

校正：悠悠自炊

2019年12月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 猫と庄造と二人のをんな

谷崎潤一郎

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>